

「冗談じゃないよ。どうせ死ぬものなら、自然に死なしておやりな。」「死んだら、死んだ時の事だわ。」

「どうせみんな畜生だ。」

「何がうそじゃ。何がうそじゃよ。」

偷

盗

「啖がつまる音じゃ。」

「どうやら、前よりも真人間らしい顔になった。」

「人殺し。親殺し。うそつき。親殺し。親殺し。」

「猫も化けるそうな。」

「殺しちゃ悪い？」

芥川
龍之介

藍岩堂



偷盜



藍岩堂



「おばば、^{いのくま}猪熊のおばば。」

^{すぎくあやのこうじ つじ}朱雀綾小路の辻で、^{すいかん もみえぼし}じみな紺の水干に^{はたち}揉烏帽子をかけた、二十ばかりの、醜い、片目の侍が、^{ひらぼね}平骨の扇を上げて、通りかかりの老婆を呼びとめた。――

^{なつがすみ}むし暑く夏霞のたなびいた空が、息をひそめたように、家々の上をおおいかぶさった、七月のある日ざかりである。男の足をとめた辻には、枝のまばらな、ひよろ長い^{はやなぎ}葉柳が一本、このごろはやる^{えやみ}疫病にでもかかったかと思う姿で、^{かた}形ばかりの影を地の上に落としているが、ここにさえ、その日にかわいた葉を動かそうという風はない。まして、日の光に照りつけられた大路には、あまりの暑さにめげたせいか、人通りも今はひとしきりとだえて、たださっき通った^{ぎっしや}牛車^{ながむし}のわだちが長々とうねっているばかり、その車の輪にひかれた、小さな^{あぶら}蛇も、切れ口の肉を青^{うろこ}ませながら、始めは尾をぴくぴくやっていたが、いつか^{あぶら}脂^{うろこ}ぎった腹を上へ向けて、もう鱗一つ動かさないようになってしまった。どこもかしこも、炎天のほこりを浴びたこの町の辻で、わずかに一滴の湿りを点じたものがあるとすれば、それはこの^{ながむし}蛇の切れ口から出た、なまぐさい腐れ水ばかりであろう。

「おばば。」

「……」

老婆は、あわただしくふり返った。見ると、年は六十ばかりであろう。^{あか ひわだいろ}垢じみた檜皮色の^{かたびら}帷子に、^{しり}黄ばんだ髪^{わらぞうり}の毛をたらし、^{かえるまた つえ}尻の切れた藁草履をひきずりながら、長い^{ひき}蛙股の杖をついた、目の丸い、口の大きな、どこか墓の顔を思わせる、卑しげな女である。

「おや、太郎さんか。」

日の光にむせるような声で、こう言うと、老婆は、杖をひきずりながら、二足三足あとへ帰って、まず口を切る前に、上くちびるをべろりとなめて見せた。

「何か用でもおありか。」

「いや、別に用じゃない。」

片目は、うすいあばたのある顔に、しいて作っただけらしい微笑をうかべながら、どこか無理のある声で、快活にこう言った。

「ただ、^{しゃきん}沙金がこのごろは、どこにいるかと思ってな。」

「用のあるは、いつも娘ばかりさね。^{とび たか}鳶が鷹を生んだおかげには。」

^{いのくま}猪熊のばばは、いやみらしく、くちびるをそらせながら、にやついた。

「用と言うほどの用じゃないが、今夜の手はずも、まだ聞かないからな。」

「なに、手はずに変わりがあるものかね。集まるのは^{らしょうもん}羅生門、^{い じょうこく}刻限は亥の上刻――みんな昔から、きまっているとおりさ。」

老婆は、こう言って、わるがしこそうに、じろじろ、左右をみまわしたが、人通りのないのに安心したのかまた、厚いくちびるをちよいとなめて、

「家内の様子は、たいてい娘が探つて来たそうだよ。それも、侍たちの中には、手のきくやつがあるまいという事さ。詳しい話は、今夜娘がするだろうがね。」

これを聞くと、太郎と言われた男は、日をよけた黄紙きがみの扇の下で、あざけるように、口をゆがめた。

「じゃ沙金しゃきんはまた、たれかあすこの侍とでも、懇意になったのだな。」

「なに、やっぱり販婦ひさぎめか何かになって、行ったらしいよ。」

「なんになって行つたって、あいつの事だ。当てになるものか。」

「お前さんは、相変わらずうたぐり深いね。だから、娘にきらわれるのさ。やきもちにも、ほどがあるよ。」

老婆は、鼻の先で笑いながら、杖つえを上げて、道ばたの蛇ながむしの死骸しがいを突つつけた。いつのまにかたかっていた青蠅あおばえが、むらむらと立ったかと思うと、また元のように止まってしまう。

「そんな事じゃ、しっかりしないと、次郎さんに取りられてしまうよ。取られてもいいが、どうせそうなれば、ただじゃすまないからね。おじいさんでさえ、それじゃ時々、目の色を変えるんだから、お前さんならなおさらだろうじゃないか。」

「わかっているわな。」

相手は、顔をしかめながら、いまいましように、柳の根へつばを吐いた。

「それがなかなか、わからないんだよ。今でこそお前さんだつて、そうやって、すましているが、娘とおじいさんとの仲をかぎつけた時には、まるで、気がふれたようだったじゃないか。おじいさんだつて、そうさ、あれで、もう少し気が強かろうものなら、すぐにお前さんと刃物三昧はものざんまいだわね。」

「そりゃもう一年前まえの事だ。」

「何年前まえでも、同じ事だよ。一度した事は、三度するって言うじゃないか。三度だけなら、まだいいほうさ。わたしなんぞは、この年まで、同じばかりを、何度したか、わかりやしないよ。」

こう言って、老婆は、まばらな歯を出して、笑った。

「冗談じゃない。——それより、今夜の相手は、曲がりなりにも、藤判官とうほうがんだ、手くばりはもうついたのか。」

太郎は、日にやけた顔に、いらだたしい色を浮かべながら、話頭を転じた。おりから、雲の峰ゆうぜんが一つ、太陽の道に当たったのであろう。あたりが倏然と、暗くなった。その中に、ただ、蛇ながむしの死骸しがいだけが、前よりもいっそう腹の脂あぶらを、ぎらつかせているのが見える。

「なんの、藤判官だといって、高が青侍の四人や五人、わたしだつて、昔とったきねづかさ。」

「ふん、おばばは、えらい勢いだな。そうして、こっちの人数にんずは？」

「いつものとおり、男が二十三人。それにわたしと娘だけさ。阿濃あこぎは、あのからだだから、朱雀門すざくもんに待っていて、もらう事にしようよ。」

「そう言えば、阿濃も、かれこれ臨月だったな。」

太郎はまた、あざけるように口をゆがめた。それとほとんど同時に、雲の影が消えて、往来はたちまち、元のように、目が痛むほど、明るくなる。——猪熊いのくまのばばも、腰をそらせて、ひとし

あずまがらす
きり 東鴉 のような笑い声を立てた。

あほう
「あの阿呆をね。たれがまあ手をつけたんだか——もつとも、阿濃は次郎さんに、執心 だつたが、まさかあの人でもなからうよ。」

「親のせんぎはともかく、あのからだじゃ何かにつけて不便だろう。」

「そりゃ、どうにでもしかたはあるのだけれど、あれが不承知なのだから、困るわね。おかげで、仲間の者へ沙汰をするのも、わたし一人という始末さ。真木島の十郎、関山の平六、高市の

たじょうまる
多襄丸 と、まだこれから、三軒まわらなくっちゃ——おや、そう言えば、油を売っているうちに、もうかれこれ 末 になる。お前さんも、もうわたしのおしゃべりには、聞き飽きたろう。」

かえるまた つえ
蛙股 の杖は、こういうことばと共に動いた。

しゃきん
「が、沙金 は？」

この時、太郎のくちびるは、目に見えぬほど、かすかにひきつった。が、老婆は、これに気がつかなかつたらしい。

「おおかた、きょうあたりは、猪熊のわたしの家で、昼寝でもしているだろうよ。きのうまでは、家にいなかったがね。」

片目は、じっと老婆を見た。そうして、それから、静かな声で、

「じゃ、いずれまた、日が暮れてから、会おう。」

「あいさ。それまでは、お前さんも、ゆっくり昼寝でもする事だよ。」

いのくま つえ あやのこうじ さる
猪熊 のばばは、口達者に答えながら、杖をひいて、歩きだした。綾小路 を東へ、猿のような
かたびらすがた わらぞうり しり
帷子姿 が、藁草履の尻にほこりをあげて、日ざしにも恐れず、歩いてゆく。——それを見送った侍は、汗のにじんだ額に、険しい色を動かしながら、もう一度、柳の根につばを吐くと、それからおもむろに、くびすをめぐらした。

ながむし しがい あおばえ
二人の別れたあとには、例の 蛇 の死骸にたかった青蠅 が、相変わらず日の光の中に、かすかな羽音を伝えながら、立つかと思うと、止まっている。……

猪熊のばばは、黄ばんだ髪の根に、じっとりと汗をにじませながら、足にかかる夏のほこりも払わずに、杖をつきつき歩いてゆく。――

通い慣れた道ではあるが、自分が若かった昔にくらべれば、どこもかしこも、うそのような変わり方である。自分が、まだ 台盤所だいばんどころ の婢女みずしをしていたころの事を思えば、――いや、思いがけない身分ちがいの男に、いどまれて、とうとう 沙金しゃきんを生んだころの事を思えば、今の都は、名ばかりで、そのころのおもかげはほとんどない。昔は、牛車ぎっしゃの行きかいのしげかった道も、今はいたずらいたがきにあざみの花が、さびしく日だまりに、咲いているばかり、倒れかかった板垣いたがきの中には、無花果いちじゆくが青い実をつけて、人を恐れない 鴉からすの群れは、昼も水のない池につどっている。そうして、自分もいつか、髪しらが白みしわがよって、ついには腰のまがるような、老いの身になってしまった。都も昔の都でなければ、自分も昔の自分でない。

その上かたち、貌かたちも変われば、心も変わった。始めて娘と今の夫との関係を知った時、自分は、泣いて騒いだ覚えがある。が、こうなって見れば、それも、当たりまえの事としか思われない。盗みおおじこうじをする事も、人を殺す事も、慣れれば、家業と同じである。言わば京の大路小路に、雑草がはえたように、自分の心も、もうすさんだ事を、苦にしないほど、すさんでしまった。が、一方から見ればまた、すべてが変わったようで、変わっていない。娘の今している事と、自分の昔した事とは、存外似よったところがある。あの太郎と次郎とにしても、やはり今の夫の若かったころと、やる事にたいした変わりはない。こうして人間は、いつまでも同じ事を繰り返してゆくのであろう。そう思えば、都も昔の都なら、自分も昔の自分である。……

猪熊いのくまのばばの心の中には、こういう考えが、漠然ばくぜんとながら、浮かんで来た。そのさびしい心もちに、つまされたのであらう、丸い目がやさしくなって、墓ひきのような顔の肉が、いつのまにか、ゆるんで来る。――と、また急に、老婆かえるまたは、生き生きと、しわだらけの顔をにやつかせて、蛙股つえの杖のはこびを、前よりも急がせ始めた。

それも、そのはずである。四五間先に、道とすすき原とを（これも、元はたれかの広庭であつたのかもしれない。）隔てる、くずれかかつた築土つじがあつて、その中に、盛りをすぎた合歡の木ねむが二三本、こけの色の日に焼けた瓦かわらの上に、ほほけた、赤い花をたらしている。それを空に、枯れ竹の柱を四すみへ立てて、古むしろの壁を下げた、怪しげな小屋が一つ、しょんぼりとかけてある。――場所と言い、様子と言い、中には、こじきでも住んでいるらしい。

別して、老婆かえるまたの目をひいたのは、その小屋の前に、腕を組んでたたずんだ、十七八の若侍で、これは、朽ち葉色の水干に黒鞆の太刀を横たえたのが、どういうわけか、しさいらしく、小屋の中をのぞいている。そのういういしい眉のあたりから、まだ子供らしさのぬけない頬のやつれが、一目で老婆かえるまたに、そのたれという事を知らせてくれた。

「何をしているのだえ。次郎さん。」

猪熊いのくまのばばは、そのそばへ歩みよと、蛙股かえるまたの杖をつを止めて、あごをしゃくりながら、呼びかけた。

相手は、驚いて、ふり返ったが、つくも髪ひきの、墓つらの面つらの、厚いくちびるをなめる舌を見ると、白い歯を見せて微笑しながら、黙って、小屋の中を指さした。

小屋の中には、破れ畳を一枚、じかに地面へ敷いた上に、四十格好がっこうの小柄な女が、石を枕まくらにして、横になっている。それも、肌はだをおおうものは、腰のあたりにかけてある、麻の汗衫一つかざみぎりで、ほとんど裸と変わりがない。見ると、その胸や腹は、指で押しても、血膿ちうみにまじった、水がどろりと流れそうに、黄いろくなめらかに、むくんでいる。ことに、むしろの裂け目から、天日てんぴのさしこんだ所で見ると、わきの下や首のつけ根に、ちょうど腐った杏あんずのような、どす黒い斑まだらがあって、そこからなんとも言いようのない、異様な臭気が、もれるらしい。

枕もとには、縁の欠けた土器かわらけがたった一つ（底に飯粒がへばりついているところを見ると、元かゆは粥でも入れたものであろう。）捨てたように置いてあって、たれがしたいはずらか、その中に五つ六つ、泥だらけの石ころむ どころが行儀よく積んである。しかも、そのまん中に、花も葉もひからびた、合歓ねむを一枝立てたのは、おおかた高坏たかつきへ添える色紙しきしの、心葉こころばをまねたものであろう。

それを見ると、気丈な猪熊いのくまのばばも、さすがに顔をしかめて、あとへさがった。そうして、その刹那せつなに、突然さっきの蛇ながむしの死骸しがいを思い浮かべた。

「なんだえ。これは。疫病えやみにかかっている人じゃないか。」

「そうさ。とてもいけないというので、どこかこの近所うちの家で、捨てたのだろう。これじゃ、どこでも持てあつかうよ。」

次郎はまた、白い歯を見せて、微笑した。

「それを、お前さんはまた、なんだって、見てなんぞいるのさ。」

「なに、今ここを通りかかったら、野ら犬が二三匹、いい餌食えじきを見つけた気で、食いそうにしていたから、石をぶつけて、追い払ってやったところさ。わたしが来なかったら、今ごろはもう、腕の一つも食われてしまったかもしれない。」

老婆かえるまたは、蛙股つえの杖にあごをのせて、もう一度しみじみ、女のからだを見た。さっき、犬が食いかかったというのは、これであろう。——破れ畳の上から、往来の砂の中へ、斜めにのぼした二の腕には、水気すいきを持った、土け色の皮膚みに、鋭い歯の跡が三つ四つ、紫がかって残っている。

が、女は、じっと目をつぶったなり、息さえ通かよっているかどうかわからない。老婆は、再び、はげしい嫌悪けんおの感おもてに、面を打たれるような心もちがした。

「いったい、生きていいのかえ。それとも、死んでいるのかえ。」

「どうだかね。」

「気らくだよ、この人は。死んだものなら、犬が食ったって、いいじゃないか。」

老婆は、こう言うかえるまたと、蛙股つえの杖をのべて、遠くから、ぐいと女の頭を突いてみた。頭はまぐらの石をはずれて、砂に髪をひきながら、たわいなく畳の上へぐたりとなる。が、病人は、依然として、目をつぶったまま、顔の筋肉一つ動かさない。

「そんな事をしたって、だめだよ。さっきなんぞは、犬に食いつかれてさえ、やっぱりじっとし

ていたんだから。」

「それじゃ、死んでいるのさ。」

次郎は、三たび白い歯を見せて、笑った。

「死んでいたって、犬に食わせるのは、ひどいやね。」

「何がひどいものかね。死んでしまえば、犬に食われたって、痛くはなしさ。」

老婆は、杖の上でのび上がりながら、ぎょろり目を大きくして、あざわらうように、こう言った。

「死ななくたって、ひくひくしているよりは、いっそ一思いに、のど笛でも犬に食いつかれたほうが、ましかもしれないわね。どうせこれじゃ、生きていたって、長い事はありやせずさ。」

「だって、人間が犬に食われるのを、黙って見てもいられないじゃないか。」

すると、猪熊いのくまのばばは、上くちびるをべろりとやって、ふてぶてしく空うそぶいた。

「そのくせ、人間が人間を殺すのは、お互いに平気で、見ているじゃないか。」

「そう言えば、そうさ。」

次郎は、ちょっと鬢びんをかいて、四たび白い歯を見せながら、微笑した。そうして、やさしく老婆の顔をながめながら、

「どこへ行くのだい、おばばは。」と問いかけた。

真木島まきのしまの十郎と、高市たけちの多襄丸たじょうまると、——ああ、そうだ。関山せきやまの平六へいろくへは、お前さんに、言づけを頼もうかね。」

こう言ううちに、猪熊いのくまのばばは、杖つえにすがって、もう二足三足歩いている。

「ああ、行ってもいい。」

次郎もようやく、病人の小屋をあとにして、老婆と肩を並べながら、ぶらぶら炎天の往来を歩きだした。

「あんなものを見たんで、すっかり気色きしょくがわるくなってしまったよ。」

老婆は、大仰おおぎょうに顔をしかめながら、

「——ええと、平六うちの家は、お前さんも知っているだろう。これをまっすぐ行って、立本寺りゅうほんじの門を左へ切れると、藤判官とうぼうがんの屋敷がある。あの一町ばかり先さ。ついでだから、屋敷のまわりでもまわって、今夜の下見をしておおきよ。」

「なにわたしも、始めからそのつもりで、こっちへ出て来たのさ。」

「そうかえ、それはお前さんにしては、気がきいたね。お前さんのにいさんの御面相じゃ、一つ間違うと、向こうにけどられそうで、下見に行っても、もらえないが、お前さんなら、大丈夫だよ。」

「かわいそうに、兄きもおばばの口にかかっちゃ、かなわないね。」

「なに、わたしなんぞはいちばん、あの人の事をよく言っているほうさ。おじいさんなんぞと来たたら、お前さんにも話せないような事を、言っているわね。」

「それは、あの事があるからさ。」

「あつたって、お前さんの悪口は、言わないじゃないか。」

「じゃおおかた、わたしは子供扱いにされているんだろう。」

二人は、こんな閑談をかわしながら、狭い往来をぶらぶら歩いて行った。歩くごとに、京の町

の荒廃は、いよいよ、まのあたりに開けて来る。家と家との間に、草いきれを立てている 蓬原^{よもぎはら}
、そのところどころに続いている古築土^{ふるつじ}、それから、昔のまま、わずかに残っている松や柳——
どれを見ても、かすかに漂う死人^{しびと}のにおいと共に、滅びてゆくこの大きな町を、思わせないもの
はない。途中では、ただ一人、手に足駄^{あしだ}をはいている、いざりのこじき^ゆに行きちがった。——
「だが、次郎さん、お気をつけよ。」

猪熊^{いのくま}のばばは、ふと太郎の顔を思い浮かべたので、ひとり苦笑を浮かべながら、こう言った。
「娘の事じゃ、ずいぶんにいさんも、夢中になりかねないからね。」

が、これは、次郎の心に、思ったよりも大きな影響を与えたい。彼は、ひいでた眉^{まゆ}の間を
、にわかに曇らせながら、不快らしく目を伏せた。

「そりゃわたしも、気をつけている。」

「気をつけていてもさ。」

老婆は、いささか、相手の感情の、この急激な変化に驚きながら、例のごとくくちびるをなめ
なめ、つぶやいた。

「気をつけていてもだわね。」

「しかし、兄きの思わくは兄きの思わくで、わたしには、どうにもできないじゃないか。」

「そう言えば、実^みもふたもなくなるがさ。実はわたしは、きのう娘に会ったのだよ。すると、き
よう未^{ひつじ}の下刻^{げこく}に、お前さんと寺の門の前で、会う事になっていると言うじゃないか。それで、
お前さんのにいさんには半月近くも、顔は合わせないようにしているとね、太郎さんがこんな事
を知ってごらん。また、お前さん、一悶着^{ひともんちゃく} だろう。」

次郎は、老婆^{びび}の娓娓^{びび}として説くことばをさえぎるように、黙って、いらだたく何度もうなず
いた。が、猪熊^{いのくま}のばばは、容易に口を閉ざしそうなけしきもない。

「さっき、向こうの辻^{つじ}で、太郎さんに会った時にも、わたしはよくそう言って来たけれどね、そ
うなりや、わたしたちの仲間だもの、すぐに刃物三昧^{はものざんまい}だろうじゃないか。万一、その時のはず
みで、娘にけがでもあったら、とわたしは、ただ、それが心配なのさ。娘は、なにしろあのお
りの気質だし、太郎さんにしても、一徹人^{いってつじん} だから、わたしは、お前さんによく頼んでおこうと思
ってね。お前さんは、死人^{しびと}が犬に食われるのさえ、見ていられないほど、やさしいんだから。」

こう言って、老婆は、いつか自分にも起こって来た不安を、しいて消そうとするように、わざ
としわがれた声で、笑って見せた。が、次郎は依然として、顔を暗くしながら、何か物思いにふ
けるように、目を伏せて歩いている。……

「大事^{おおごと} にならなければいいが。」

猪熊^{いのくま}のばばは、蛙股^{かえるまた}の杖^{つえ}を早めながら、この時始めて心の底で、しみじみこう、祈ったの
である。

かれこれその時分の事である。楚^{すわえ}の先に 蛇^{ながむし}の死骸^{しがい}をひっかけた、町の子供が三四人、病人

の小屋の外を通りかかると、中でもいたずらな一人が、遠くから及び腰になって、その ^{ながむし} 蛇 を女の顔の上へほうり上げた。青く ^{あぶら} 脂 の浮いた腹がぺたり、女の ^{ほお} 頬 に落ちて、それから、腐れ水にぬれた尾が、ずるずるあごの下へたれる——と思うと、子供たちは、一度にわっとわめきながら、おびえたように、四方へ散った。

今まで死んだようになっていた女が、その時急に、黄いろくたるんだまぶたをあけて、腐った卵の白味のような目を、どんより空に ^{そら} 据えながら、^す 砂まぶれの指を一つびくりとやると、声とも息ともわからないものが、干割れたくちびるの奥のほうから、かすかにもれて来たからである。

いのくま すざく おおじ
 猪熊のばばに別れた太郎は、時々扇で風を入れながら、日陰も選ばず、朱雀の大路を北へ、進まない歩みをはこんだ。――

くりげ ひらもん くら
 日中の往来は、人通りもきわめて少ない。栗毛の馬に平文の鞍を置いてまたがった武士が
 よろいびつ ちょうどが あやいがさ ゆうゆう
 一人、鎧櫃を荷なった調度掛けを従えながら、綾藺笠に日をよけて、悠々と通ったあとには
 つばくら いたぶき
 、ただ、せわしない燕が、白い腹をひらめかせて、時々、往来の砂をかすめるばかり、板葺
 ひわだぶき ぐも と
 、檜皮葺の屋根の向こうに、むらがっているひでり雲も、さっきから、凝然と、金銀銅鉄を溶か
 したまま、小ゆるぎをするけしきはない。まして、両側に建て続いた家々は、いずれもしんと静
 いたじとみ かますだれ
 まり返って、その板葺や蒲簾の後ろでは、町じゅうの人がことごとく、死に絶えてしまった
 かとさえ疑われる。――

いのくま しゃきん
 猪熊のばばの言ったように、沙金を次郎に奪われるという恐れは、ようやく目の前に迫って
 来た。あの女が、――現在養父にさえ、身を任せたあの女が、あばたのある、片目の、醜いお
 れを、日にこそ焼けているが目鼻立ちの整った、若い弟に見かえるのは、もとよりなんの不思議
 もない。おれは、ただ、次郎が、――子供の時から、おれを慕ってくれたあの次郎が、おれの心
 もちを察してくれて、よしや沙金のほうから手を出してもその誘惑に乗らないだけの、慎みを持
 ってくれる事と、いちずに信じ切っていた。が、今になって考えれば、それは、弟を買いかぶ
 りょうけん
 った、虫のいい量見に過ぎなかった。いや、弟を見上げすぎたというよりも、沙金のみだらな
 こ
 媚びのたくみを、見下げすぎた誤りだった。ひとり次郎ばかりではない。あの女のまなざし一
 つで、身を滅ぼした男の数は、この炎天にひるがえる燕の数よりも、たくさんある。現にこう
 つばくら かず
 言うおれでさえ、ただ一度、あの女を見たばかりで、とうとう今のように、身をおとした。……

しじょうぼうもん つじ あかいとげ おんなぐるま
 すると四条坊門の辻を、南へやる赤糸毛の女車おんなぐるまが、静かに太郎の行く手を通りすぎる。
 べに すそご したすだれ
 車の中の人は見えないが、紅の裾濃に染めた、すずしの下簾が、町すじの荒涼としているだ
 わらべ ぞうしき
 けに、ひときわ目に立ってなまめかしい。それにつき添った牛飼いの童と雑色とは、うさんら
 つの おうよう
 しく太郎のほうへ目をやったが、牛だけは、角をたれて、漆のように黒い背を鷹揚にうねらしな
 がら、わき見もせず、のっそりと歩いてゆく。しかしとりとめのない考えに沈んでいる太郎
 には、車の金具の、まばゆく日に光ったのが、わずかに目にはいっただけである。

彼は、しばらく足をとめて、車を通りこさせてから、また片目を地に伏せて、黙々と歩きはじめた。――

ひとや ほうめん
 (おれが右の獄の放免をしていた時の事を思えば、今では、遠い昔のような、心もちがする。あの時のおれと今のおれとを比べれば、おれ自身にさえ、同じ人間のような気はしない。あのころのおれは、三宝を敬う事も忘れなければ、王法にしたがう事も怠らなかつた。それが、今では、盗みもする。時によっては、火つけもする。人を殺した事も、二度や三度ではない。ああ、昔

のおれは——仲間の放免といっしょになって、いつもの七半しちはんを打ちながら、笑い興じていた、あの昔のおれは、今のおれの目から見ると、どのくらいしあわせだったかわからない。

考えれば、まだきのうのように思われるが、実はもう一年前まえになった。——あの女が、盗みのとが咎で、検非違使の手から、右の獄けびしへ送られる。おれがそれと、ふとした事から、牢格子ひとやを隔てて、話し合うような仲になる。それから、その話が、だんだんたび重なって、いつか互いに身の上の事まで、打ち明け始める。とうとう、しまいには、猪熊いのくまのばばや同類の盗人ろうごうしが、牢を破ってあの女を救い出すのを、見ないふりをして、通してやった。

その晩から、おれは何度となく、猪熊のばばの家へ出はかりをした。沙金しゃきんは、おれの行く時刻を見はからって、あの半部はじとみの間から、雀色時すずめいろどきの往来をのぞいている。そうしておれの姿が見えると、鼠鳴ねずみなきをして、はいれと言う。家の中には、下衆女の阿濃げすおんなのほかに、たれもない。やがて、蔀しとみをおろす。結び燈台へ火をつける。そうして、あの何畳かの畳の上に、折敷おしきや高坏たかつきを、所狭く置きならべて、二人ぎりの小酒盛こざかもりをする。そのあげくが、笑ったり、泣いたり、けんかをしたり、仲直りななぢりをしたり——言わば、世間並みの恋人どうしが、するような事をして、いつでも夜を明かした。

日の暮れよに来て、夜のひき明け方に帰る。——あれが、それでも一月ひとつきは続いたろう。そのうちに、おれには沙金しゃきんが猪熊のばばのつれ子である事、今では二十何人かの盗人の頭かしらになって、時々らくちゅう洛中をさわがせている事、そうしてまた、日ごろは容色くぐつを売って、傀儡同様な暮らしをしている事——そういう事が、だんだんわかって来た。が、それは、かえってあの女に、双紙の中の人間めいた、不思議な円光えんこうをかけるばかりで、少しも卑しいなどという気は起こさせない。無論、あの女は、時々おれに、いっそ仲間へはいれと言う。が、おれはいつも、承知しない。すると、あの女は、おれの事おくびょうを臆病おくびょうだと言って、ばかにする。おれはよくそれで、腹を立てた。(.....)

「はい、はい」と馬をしかる声こゑがする。太郎は、あわてて、道をよけた。

米俵こめを二俵ずつ、左右へ積んだ馬をひいて、汗衫かざみ一つの下衆げすが、三条坊門つじの辻を曲がりながら、汗もふかずに、炎天おおじの大路を南へ下って来る。その馬の影が、黒く地面に焼きついた上を、燕つばくらが一羽、ひらり羽根はねを光らせて、すじかいに、空そらへ舞い上がった。と思うと、それがまたつぶて礫つぶてを投げるように、落として来て、太郎の鼻の先を一字に、向こうの板庇いたびさしの下へはいる。

太郎は、歩きながら、思い出したように、はたはたと、黄紙きがみの扇あふぎを使った。——

(そういう月日が、続くともなく続くうちに、おれは、偶然あの女と養父との関係に、気がついた。もっともおれ一人が、沙金しゃきんを自由にする男でないという事も、知っていなかったわけではない。沙金自身くげさえ、関係した公卿の名や法師の名を、何度も自慢らしくおれに話した事がある。が、おれはこう思った。あの女の肌はだは、おおぜいの男を知っているかもしれない。けれども、

あの女の心は、おれだけが占有している。そうだ、女の操^{みさお}は、からだにはない。——おれは、
こう信じて、おれの嫉妬^{しつと}をおさえていた。もちろんこれも、あの女から、知らず知らずおれが
教わった、考え方にすぎないかもしれない。が、ともかくもそう思うと、おれの苦しい心はいく
ぶんか楽^{らく}になった。しかし、あの女と養父との関係は、それとちがう。

おれは、それを感じた時に、なんとも言えず、不快だった。そういう事をする親子なら、殺
して飽きたらない。それを黙って見る実の母の、猪熊^{いのくま}のばばもまた、畜生より、無残なやつだ。
こう思ったおれは、あの酔いどれのおやじの顔を見るたびに、何度太刀へ手をかけたか、わから
ない。が、沙金はそのたびに、おれの前で、ことさら、手ひどく養父をばかにした。そうしてそ
の見え透いた手くだがまた、不思議におれの心を鈍らせた。「わたしはおとうさんがいやでいや
でしかたがないんです」と言われれば、養父をにくむ気にはなっても、沙金をにくむ気には、ど
うしてもなれない。そこで、おれと養父とは、きょうがきょうまで、互いににらみ合いながら、
何事もなくすぎて来た。もしあのおじじにもう少し、勇気があったなら、——いや、おれにもう
少し、勇気があったなら、おれたちはとうの昔、どちらか死んでいた事であろう。……)

頭を上げると、太郎はいつか二条を折れて、耳敏川^{みみとがわ}にまたがっている、小さい橋にかかっ
ていた。水のかれた川は、細いながらも、焼き太刀のように、日を反射して、絶えてはつづく葉柳^{はやなぎ}
と家々との間に、かすかなせせらぎの音を立てている。その川のはるか下に、黒いものが二つ
三つ、鶺鴒^うの鳥かと思うように、流れの光を乱しているのは、おおかた町の子供たちが、水でも浴
びているのであろう。

太郎の心には、一瞬の間、幼かった昔の記憶が、——弟といっしょに、五条の橋の下で、鮠^{はえ}
釣った昔の記憶が、この炎天に通う微風のように、かなしく、なつかしく、返って来た。が、彼
も弟も、今は昔の彼らではない。

太郎は、橋を渡りながら、うすいあばたのある顔に、また険しい色をひらめかせた。——

(すると、突然ある日、そのころ筑後の前司の小舎人^{ちくご ぜんじ ことねり}になっていた弟が、盗人の疑いをかけら
れて、左の獄^{ひとや}へ入れられたという知らせが来た。放免^{ほうめん}をしているおれには、獄中の苦しさ
が、たれよりもよく、わかっている。おれは、まだ筋骨のかたまらない弟の身の上を、自分の事
のように、心配した。そこで、沙金^{しゃきん}に相談すると、あの女はさもわけがなさそうに、「牢^{ろう}を破ればい
いじゃないの」と言う。かたわらにいた猪熊^{いのくま}のばばも、しきりにそれをすすめてくれる。おれは
、とうとう覚悟をきめて、沙金といっしょに、五六人の盗人を語り集めた。そうして、その夜の
うちに、獄^{ひとや}をさわがして、難なく弟を救い出した。その時、受けた傷の跡は、今でもおれの胸
に残っている。が、それよりも忘れられないのは、おれがその時始めて、放免^{ほうめん}の一人を切り殺し
た事であった。あの男の鋭い叫び声と、それから、あの血のにおいとは、いまだにおれの記憶を
離れない。こう言う今でも、おれはそれを、この蒸し暑い空気の中に、感じるような心もちが
する。

その翌日から、おれと弟とは、猪熊の沙金の家で、人目を忍ぶ身になった。一度罪を犯したからは、正直に暮らすのも、あぶない世渡りをしてゆくのも、検非違使の目には、変わりがない。どうせ死ぬくらいなら、一日も長く生きていよう。そう思ったおれは、とうとう沙金の言うなりになって、弟といっしょに盗人の仲間入りをした。それからのおれは、火もつける。人も殺す。悪事という悪事で、なに一つしなかったものはない。もちろん、それも始めは、いやいやした。が、してみると、意外に造作がない。おれはいつのまにか、悪事を働くのが、人間の自然かもしれないと思いだした。……)

太郎は、半ば無意識に辻をまがった。辻には、石でまわりを積んだ一囲いの土饅頭があつて、その上に石塔婆が二本、並んで、午後の日にかつと、照りつけられている。その根元にはまた、何匹かのとかげが、煤のように黒いからだを、気味悪くへばりつかせていたが、太郎の足音に驚いたのであろう、彼の影の落ちるよりも早く、一度にざわめきながら、四方へ散った。が、太郎は、それに目をやるけしきもない。――

「おれは、悪事をつむに従って、ますます沙金に愛着を感じて来た。人を殺すのも、盗みをするものも、みんなあの女ゆえである。――現に牢を破ったのさえ、次郎を助けようと思うほかに、一人の弟を見殺しにすると、沙金にわられるのを、おそれたからであった。――そう思うと、なおさらおれは、何に換えても、あの女を失いたくない。

その沙金を、おれは今、肉身の弟に奪われようとしている。おれが命を賭けて助けてやった、あの次郎に奪われようとしている。奪われようとしているのか、あるいは、もう奪われているのか、それさえも、はっきりはわからない。沙金の心を疑わなかったおれは、あの女がほかの男をひっぱりこむのも、よくない仕事の方便として、許していた。それから、養父との関係も、あのおじじが親の威光で、何も知らないうちに、誘惑したと思えば、目をつぶって、すごせない事はない。が、次郎との仲は、別である。

おれと弟とは、気だてが変わっているようで、実は見かけほど、変わっていない。もっとも顔かたちは、七八年前の痘瘡が、おれには重く、弟には軽かったので、次郎は、生まれついた眉目をそのままに、うつくしい男になったが、おれはそのために片目つぶれた、生まれもつかない不具になった。その醜い、片目のおれが、今まで沙金の心を捕えていたとすれば、(これも、おれのうぬぼれだろうか。)それはおれの魂の力に相違ない。そうして、その魂は、同じ親から生まれた弟も、おれに変わりなく持っている。しかも、弟は、たれの目にもおれよりはうつくしい。そういう次郎に、沙金が心をひかれるのは、もとより理の当然である。その上また、次郎のほうでも、おれにひきくらべて考えれば、到底あの女の誘惑に、勝てようとは思われない。いや、おれは、始終おれの醜い顔を恥じている。そうして、たいていの情事には、おのずからひかえ目になっている。それでさえ、沙金には、気違ひのように、恋をした。まして、自分の美しさを知っている次郎が、どうして、あの女の見せる媚びを、返さずにいられよう。――

こう思えば、次郎と沙金とが、近づくようになるのは、無理もない。が、無理がないだけ、それだけ、おれには苦痛である。弟は、沙金をおれから奪おうとする。――それも、沙金の全部を、おれから奪おうとする。いつかは、そうして必ず。ああ、おれの失うのは、ひとり沙金ばかり

ではない。弟もいっしょに失うのだ。そうして、そのかわりに、次郎と言う名の敵かたきができる。
——おれは、敵かたきには用捨しない。敵かたきも、おれに用捨はしないだろう。そうなれば、落ち着くところは、今からあらかじめわかっている。弟を殺すか、おれが殺されるか。……)

太郎は、死人しびとのおいが、鋭く鼻を打ったのに、驚いた。が、彼の心の中の死が、におったというわけではない。見ると、猪熊いのくまの小路のあたり、とある網代の塀あじろの下へいに腐爛ふらんした子供の死骸しがいが二つ、裸のまま、積み重ねて捨ててある。はげしい天日てんぴに、照りつけられたせいか、変色した皮膚のところどころが、べつとりと紫がかった肉を出して、その上にはまた青蠅あおばえが、何匹となく止まっている。そればかりではない。一人の子供のうつむけた顔の下には、もう足の早いあり蟻がついた。——

太郎は、まのあたりに、自分の行く末を見せつけられたような心もちがした。そうして、思わず下くちびるを堅くかんだ。——

「ことに、このごろは、沙金しゃきんもおれを避けている。たまに会っても、いい顔をした事は、一度もない。時々はおれに面めんと向かって、悪口あっこうさえきく事がある。おれはそのたびに腹を立てた。打った事もある。蹴けった事もある。が、打っているうちに、蹴けっているうちに、おれはいつでも、おれ自身せっかんを折檻しょうがいしているような心もちがした。それも無理はない。おれの二十年の生涯しょうがいは、沙金しゃきんのあの目の中に宿っている。だから沙金を失うのは、今までのおれを失うのと、変わりはない。

沙金を失い、弟を失い、そうしてそれとともにおれ自身を失ってしまう。おれはすべてを失う時が来たのかもしれない。……)

そう思ううちに、彼は、もう猪熊いのくまのばばの家の、白い布をぶら下げた戸口へ来た。まだここまでも、死人しびとのおいは、伝わって来るが、戸口のかたわらに、暗い緑の葉をたれた枇杷びわがあって、その影がわずかながら、涼しく窓に落ちている。この木の下を、この戸口へはいった事は、何度あるかわからない。が、これからは？

太郎は、急にある気づかれを感じて、一味の感傷にひたりながら、その目に涙をうかべて、そっと戸口へ立ちよった。すると、その時である。家の中から、たちまちけたたましい女の声おじが、猪熊いのくまの爺おじの声に交じって、彼の耳を貫ぬいた。沙金しゃきんなら、捨ててはおけない。

彼は、入り口の布をあげて、うすぐらい家の中へ、せわしく一足ふみ入れた。

猪熊のばばに別れると、次郎は、重い心をいだきながら、立本寺^{りゅうほんじ}の門の石段を、一つずつ数えるように上がって、そのところどころ剥落^{はくらく}した朱塗りの丸柱の下へ来て、疲れたように腰をおろした。さすがの夏の日も、斜めにつき出した、高い瓦^{かわら}にさえぎられて、ここまではさして来ない。後ろを見ると、うす暗い中に、一体の金剛力士が青蓮花を踏みながら、左手の杵^{きね}を高くあげて、胸のあたりに燕^{つばくら}の糞^{ふん}をつけたまま、寂然^{せきぜん}と境内^{けいだい}の昼を守っている。——次郎は、ここへ来て、始めて落ち着いて、自分の心もちが考えられるような気になった。

日の光は、相変わらず目の前の往来を、照り白^{しら}ませて、その中にとびかう燕^{つばくら}の羽を、さながら黒縹子^{くろじゆす}か何かのように、光らせている。大きな日傘^{ひがさ}をさして、白い水干^{すいかん}を着た男が一人、青竹^{ふばさみ}の文挾^{ふみ}にはさんだ文を持って、暑そうにゆっくり通ったあとは、向こうに続いた築土の上へ、影を落とす犬もない。

次郎は、腰にさした扇^{くろがき}をぬいて、その黒柿^{くろがき}の骨を、一つずつ指で送ったり、もどしたりしながら、兄と自分との関係を、それからそれへ、思い出した。——

なんで自分は、こう苦しまなければ、ならないのであろう。たった一人の兄は、自分を敵^{かたき}のように思っている。顔を合わせるごとに、こちらから口をきいても、浮かない返事をして、話の腰を折ってしまう。それも、自分と沙金^{しゃきん}とが、今のような事になってみれば、無理のない事に相違ない。が、自分は、あの女に会うたびに、始終兄にすまないと思っている。別して、会ったのちのさびしい心もちでは、よく兄がいとしくなって、人知れない涙もこぼしこぼした。現に、一度なぞは、このまま、兄にも沙金にも別れて、東国へでも下ろうとさえ、思った事がある。そうしたら、兄も自分を憎まなくなるだろうし、自分も沙金を忘れられるだろう。そう思って、よそながら暇^{いとま}ごいをするつもりで、兄の所へ会いにゆくと、兄はいつも、そっけなく、自分をあしらった。そうして、沙金に会うと、——今度は自分が、せっかくの決心を忘れてしまう。が、そのたびに、自分はどのくらい、自分自身を責めた事であろう。

しかし、兄には、自分のこの苦しみがわからない。ただいちずに、自分を、恋の敵^{かたき}だと思っている。自分は、兄にののしられてもいい。顔につばきされてもいい。あるいは場合によっては、殺されてもいい。が、自分が、どのくらい自分の不義を憎んでいるか、どのくらい兄に同情しているか、それだけは、察していてもらいたい。その上でならば、どんな死にざまをするにしても、兄の手にかかれば、本望だ。いや、むしろ、このごろの苦しみよりは、一思いに死んだほうが、どのくらいしあわせだかわからない。

自分は、沙金^{しゃきん}に恋をしている。が、同時に憎んでもいる。あの女の多情な性質は、考えただけでも、腹立たしい。その上に、絶えずうそをつく。それから、兄や自分でさえためらうような、ひどい人殺しも、平気です。時々、自分は、あの女のみだらな寝姿をながめながら、どうして、自分がこんな女に、ひかされるのだろうと思ったりした。ことに、見ず知らずの男にも、なれなれしく肌^{はだ}を任せるのを見た時には、いっそ自分の手で、殺してやろうかという気にさえなった。それほど、自分は、沙金を憎んでいる。が、あの女の目を見ると、自分はやっぱり、誘惑に陥

ってしまう。あの女のように、醜い魂と、美しい肉身とを持った人間は、ほかにいない。

この自分の憎しみも、兄にはわかっていないようだ。いや、元来兄は、自分のように、あの女の獣のような心を、憎んではいないらしい。たとえば、沙金しゃきんとほかの男との関係を見るにしても、兄と自分とは全く目がちがう。兄は、あの女がたれといっしょにいるのを見ても、黙っている。あの女の一時の気まぐれは、気まぐれとして、許しているらしい。が、自分は、そういかない。自分にとっては、沙金はだみが肌身を汚す事は、同時に沙金けがが心を汚す事だ。あるいは心を汚すより、以上の事のように思われる。もちろん自分には、あの女の心が、ほかの男に移るのも許されない。が、肌身をほかの男に任せるのは、それよりもなお、苦痛である。それだからこそ、自分は兄に対しても、嫉妬しつとをする。すまないとは思いつつ、嫉妬をする。してみると、兄と自分との恋は、まるでちがう考えが、元になっているのではあるまいか。そうしてそのちがいが、よい二人の仲を、悪くするのではあるまいか。……

次郎は、ぼんやり往来をながめながら、こんな事をしみじみと考えた。すると、ちょうどその時である。突然、けたたましい笑い声が、まばゆい日の光を動かして、往来のどちらかから聞こえて来た。と思うと、かん高い女の声だかが、舌のまわらない男の声といっしょになって、人もなげに、みだらな冗談を言いかわして来る。次郎は、思わず扇を腰にさして、立ち上がった。

が、柱の下をはなれて、まだ石段へ足をおろすかおろさないうちに、小路こうじを南へ歩いて来た二人の男女なんによが、彼の前を通りかかった。

男は、樺桜かばざくらの直垂ひたたれに梨打なしうちの烏帽子えぼしをかけて、打ち出しの太刀たちを濶達かつたつに佩はいた、三十ばかりの年配で、どうやら酒に酔っているらしい。女は、白地にうす紫の模様のある衣きぬを着て、市女笠いちめがさに被衣かづきをかけているが、声と言しい、物ごしと言しい、紛れもない沙金しゃきんである。——次郎は、石段をおりながら、じっとくちびるをかんで、目をそらせた。が、二人とも、次郎には、目をかける様子がない。

「じゃよくって。きっと忘れちゃいやよ。」

「大丈夫だよ。おれがひきうけたからは、大船おおぶねに乗った気であるがいい」

「だって、わたしのほうじゃ命がけなんですもの。このくらい、念を押さなくちゃしようがないわ。」

男は赤ひげの少しある口を、咽まで見えるほど、あけて笑いながら、指で、ちょっと沙金の頬ほおを突ついた。

「おれのほうも、これで命がけさ。」

「うまく言っているわ。」

二人は、寺の門の前を通りすぎて、さっき次郎が猪熊いのくまのばばと別れた辻つじまで行くと、そこに足をとめたまましばらくは、人目も恥じず、ふざけ合っていたが、やがて、男は、振りかえり振りかえり、何かしきりにからかいながら、辻を東へ折れてしまう。女は、くびすをめぐらして、まだくすくす笑いながら、またこっちへ帰って来る。——次郎は、石段の下にたたずんで、うれしいのか情けないのか、わからないような感情に動かされながら、子供らしく顔を赤らめて、被衣かづきの中からのぞいている、沙金しゃきんの大きな黒い目を迎えた。

「今のやつを見た？」

沙金は、^{かずき}被衣を開いて、汗ばんだ顔を見せながら、笑い笑い、問いかけた。

「見なくてさ。」

「あれはね。——まあここへかけましょう。」

二人は、石段の下の段に、肩をならべて、腰をおろした。幸い、ここには門の外に、ただ一本、細い幹をくねらした、赤松の影が落ちている。

「あれは、^{とうほうがん}藤判官の所の侍なの。」

沙金は、石段の上に腰をおろすかおろさないのに、^{いちめがさ}市女笠をぬいで、こう言った。小柄な、手足の動かし方に^{ねこ}猫のような^{びんしょう}敏捷さがある、^{ちゅうにく}中肉の、二十五六の女である。顔は、恐ろしい野性と異常な美しさだが、一つになったとでもいうのであろう。狭い額とゆたかな^{ほお}頬と、あざやかな歯とみだらなくちびると、^{おうよう}鋭い目と^{まゆ}鷹揚な眉と、——すべて、一つになり得そうもないものが、不思議にも一つになって、しかもそこに、^{つめ}爪ばかりの無理もない。が、中でもみごとなのは、肩にかけた髪で、これは、日の光のかげんによると、黒い上につややかな青みが浮く。さながら、^{からす}烏の羽根と違いがない。次郎は、いつ見ても変わらない女のなまめかしさを、むしろ憎いように感じたのである。

「そうして、お前さんの^{おとこ}情人なんだろう。」

沙金は、目を細くして笑いながら、無邪気らしく、首をふった。

「あいつのばかと言ったら、ないのよ。わたしの言う事なら、なんでも、犬のようにきくじゃないの。おかげで、何もかも、すっかりわかってしまった。」

「何がさ。」

「何がって、^{とうほうがん}藤判官の屋敷の様子がよ。そりゃひとかたならないおしゃべりなんでしょう。さっきなんぞは、このごろ、あすこで買った馬の話まで、話して聞かしたわ。——そうそう、あの馬は太郎さんに頼んで盗ませようかしら。^{みちのくで}陸奥出の^{さんさいごま}三才駒だっていうから、まんざらでもないわね。」

「そうだ。兄きなら、なんでもお前の^{ぎょい}御意次第だから。」

「いやだわ。やきもちをやかれるのは、わたし大きらい。それも、太郎さんなんぞ、——そりゃはじめは、わたしのほうでも、少しはどうとか思ったけれど、今じゃもうなんでもないわ。」

「そのうちに、わたしの事もそう言う時が来やしないか。」

「それは、どうだかわかりゃしない。」

^{しゃきん}沙金は、またかん^{だか}高い声で、笑った。

「おこったの？ じゃ、来ないって言いましょうか。」

^{ないしんによやしや}「内心女夜叉さね。お前は。」

次郎は、顔をしかめながら、足もとの石を拾って、向こうへ投げた。

「そりゃ、女夜叉かもしれないわ。ただ、こんな女夜叉にほれられたのが、あなたの因果だわね。——まだうたぐっているの。じゃわたし、もう知らないからいい。」

沙金は、こう言って、しばらくじっと、往来を見つめていたが、急に鋭い目を、次郎の上に転じると、たちまち冷やかな微笑が、くちびるをかすめて、一過した。

「そんなに疑うのなら、いい事を教えてあげましょうか。」

「いい事？」

「ええ」

女は、顔を次郎のそばへ持って来た。うす化粧のにおいが、汗にまじって、むんと鼻をつく。——次郎は、身のうちがむずがゆいほど、はげしい衝動を感じて、思わず顔をわきへむけた。

「わたしね、あいつにすっかり、話してしまったの。」

「何を？」

「今夜、みんなで とうほうがん 藤判官の屋敷へ、行くという事を。」

次郎は、耳を信じなかった。息苦しい官能の刺激も、一瞬の あいだ 間に消えてしまう。——彼はただ、疑わしげに、むなしく女の顔を見返した。

「そんなに驚かなくていいわ。なんでもない事なのよ。」

しゃきん

沙金は、やや声を低めて、あざわらうような調子を出した。

「わたしこう言ったの。わたしの寝る部屋は、あの へや 大路面の おおじめん 檜垣の ひがき すぐそばなんです、ゆうべ ひがき その檜垣の外で、きっと盗人でしょう、五六人の男が、あなたの所へはいる相談をしているのが聞こえました。それがしかも、今夜なんです。おなじみがい、教えてあげましたから、それ相当の用心をしないと、あぶのうござんすよって。だから、今夜は、きっと向こうにも、手くばりがあるわ。あいつも、今人を集めに行ったところなの。二十人や三十人の侍は、くるにちがいなくてよ。」

「どうしてまた、そんなよけいな事をしたのさ。」

次郎は、まだ落ち着かない様子で、当惑したらしく、 しゃきん 沙金の目をうかがった。

「よけいじゃないわ。」

沙金は、気味悪く、微笑した。そうして、左の手で、そっと次郎の右の手に、さわりながら、
「あなたのためにしたの。」

「どうして？」

こう言いながら、次郎の心には、恐ろしいあるものが感じられた。まさか——

「まだわからない？ そう言っておいて、太郎さんに、馬を盗む事を頼めば——ね。いくらなんだって、一人じゃかなわないでしょう。いえさ、ほかのものが加勢をしたって、知れたものだわ。そうすれば、あなたもわたしも、いいじゃないの。」

次郎は、全身に水を浴びせられたような心もちがした。

「兄きを殺す！」

しゃきん

沙金は、扇をもてあそびながら、素直にうなずいた。

「殺しちゃ悪い？」

「悪いよりも——兄きを わな 罠にかけて——」

「じゃあなた殺せて？」

次郎は、沙金の目が、野猫のように鋭く、自分を見つめているのを感じた。そうして、その目 のねこ の中に、恐ろしい力があって、それが次第に自分の意志を、 まひ 麻痺させようとするのを感じた。

「しかし、それは ひきょう 卑怯だ。」

「卑怯でも、しかたがなくはない？」

しゃきん

沙金は、扇をすてて、静かに両手で、次郎の右の手をとらえながら、追窮した。
「それも、兄き一人やるのならいいが、仲間を皆、あぶない目に会わせてまで——」

こうかつ

こう言いながら、次郎は、しまったと思った。狡猾な女はもちろん、この機会を見のがさない

。

「一人やるのならいいの？ なぜ？」

しゃきん

次郎は、女の手をはなして、立ち上がった。そうして、顔の色を変えたまま、黙って、沙金の前を、右左に歩き出した。

「太郎さんを殺していいんなら、仲間なんぞ何人殺したって、いいでしょう。」

沙金は、下から次郎の顔を見上げながら、一句を射た。

「おばばはどうする？」

「死んだら、死んだ時の事だわ。」

ぶべつ

次郎は、立ち止まって、沙金の顔を見おろした。女の目は、侮蔑と愛欲とに燃えて炭火のように熱を持っている。

「あなたのためなら、わたしたれを殺してもいい。」

さそり

せんりつ

このことばの中には、蝸のように、人を刺すものがある。次郎は、再び一種の戦慄を感じた

。

「しかし、兄きは——」

「わたしは、親も捨てているのじゃない？」

こう言って、沙金は、目を落とすと、急に張りつめた顔の表情がゆるんで、焼け砂の上へ、日に光りながらはらはらと涙が落ちた。

「もうあいつに話してしまったのに、——今さら取り返しはつきはしない。——そんな事がわかったら、わたしは——わたしは、仲間に——太郎さんに殺されてしまうじゃないの。」

その切れ切れなことばと共に、次郎の心には、おのずから絶望的な勇気が、わいてくる。血の色を失った彼は、黙って、土にひざをつきながら、冷たい両手に堅く、沙金の手をとらえた。

しゃきん

彼らは二人とも、その握りあう手のうちに、恐ろしい承諾の意を感じたのである。

白い布をかかげて、家の中に一足ふみこんだ太郎は、意外な光景に驚かされた。――

見ると、広くもない部屋の中には、^{へや} 厨 ^{くりや} へ通う遣戸 ^{やりど} が一枚、斜めに網代屏風 ^{あじろびょうぶ} の上へ、倒れかか
 って、その拍子にひっくり返ったものであろう、蚊やりをたく土器 ^{かわらけ} が、二つになってころがりな
 がら、一面にあたりへ、燃え残った青松葉を、灰といっしょにふりまいている。その灰を頭から
 浴びて、ちぢれ髪 ^{ふと} の、色の悪い、肥 ^{げすおんな} った、十六七の下衆女 ^{さかぶと} が一人、これも酒肥 ^{ふと} りに肥 ^{ふと} った、は
 げ頭の老人に、髪 ^{ひとえ} の毛をつかまれながら、怪しげな麻の単衣の、前もあらわに取り乱したまま、
 足をばたばた動かして、気違 ^{へいし} いのように、悲鳴を上げる――と、老人は、左手に女の髪をつか
 んで、右手に口の欠けた瓶子 ^{へいし} を、空ざまにさし上げながら、その中にすすけた液体を、しいて相
 手の口へつぎこもうとする。が、液体は、いたずらに女の顔を、目と言わず、鼻と言わず、うす
 黒く横流れするだけで、口へは、ほとんどはいらないらしい。そこで老人は、いよいよ、気を
 いらって無理に女の口を、割ろうとする。女は、とられた髪も、ぬけるほど強く、頭を振って、
 一滴もそれを飲むまいとする。手と手と、足と足とが、互いにもつれたり、はなれたりして、明
 るい所から、急にうす暗い家の中へはいった、太郎の目には、どちらがどちらのからだとも、わ
 からない。が、二人がたれだという事は、もちろん一目見て、それと知れた。――

太郎は、草履 ^{そうり} を脱ぐ間 ^ま ももどかしそうに、あわただしく部屋 ^{へや} の中へおどりこむと、とっさに老
 人の右の手をつかんで、苦もなく瓶子 ^{へいし} をもぎはなしながら、怒気 ^{いっかつ} を帯びて、一喝した。

「何をする？」

太郎の鋭いこのことは、たちまちかみつくような、老人のことはで答えられた。

「おぬしこそ、何をする。」

「おれか。おれならこうするわ。」

太郎は、瓶子 ^{へいし} を投げすてて、さらに相手の左の手を、女の髪からひき離すと、足をあげて老
 人 ^{やりど} を、遣戸 ^{けたお} の上へ蹴倒した。不意の救いに驚いたのであろう、阿濃 ^{あこぎ} はあわてて、一二間 ^{けんは} 這いのい
 たが、老人 ^{しりえ} の後 ^{かみほとけ} へ倒れたのを見ると、神仏 ^{だっと} をおがむように、太郎の前へ手を合わせて、震え
 ながら頭を下げた。と思うと、乱れた髪もつくろわずに、脱兎のごとく身をかわして、はだしの
 まま、縁を下へ、白い布をひらりとくぐる。――猛然として、追いすがろうとする猪熊 ^{いのくま} の爺 ^{おじ} を
 、太郎が再び ^{いっしゅう} 一蹴 ^{びわ} して、灰の中に倒した時には、彼女はすでに息を切らせて、枇杷 ^{びわ} の木の下を
 北へ、こけつまろびつして、走っていた。………

「助けてくれ。人殺しじゃ。」

老人は、こうわめきながら、始めの勢いにも似ず、網代屏風 ^{あじろびょうぶ} をふみ倒して、厨 ^{くりや} のほうへ逃げ
 ようとする。――太郎は、すばやく猿臂 ^{えんび} をのべて、浅黄 ^{すいかん} の水干 ^{えりがみ} の襟上 ^{えりがみ} をつかみながら、相手を
 そこへ引き倒した。

「人殺し。人殺し。助けてくれ。親殺しじゃ。」

「ばかな事を。たれがおぬしなぞ殺すものか。」

太郎は、ひざの下に老人を押し伏せたまま、こう高らかに、あざわらった。が、それと同時に

、このおやじを殺したいという欲望が、おさえがたいほど強く、起こって来た。殺すのには、もちろんなんのめんどもない。ただ、一突き——あの赤く皮のたるんでいるうなじ頸を、ただ、一突き突きさえすれば、それでもう万事が終わってしまう。突き通した太刀のたちきっさきが、畳へはいる手答えと、その太刀の柄へ感じて来る、断末魔の身もだえと、そうして、また、その太刀を押しもどす勢いで、あふれて来る血のにおいと、——そういう想像は、おのずから太郎の手を、つづらま葛巻きの太刀の柄へのつかばさせた。

「うそじゃ。うそじゃ。おぬしは、いつもわしを殺そうと思っている。——やい、たれか助けてくれ。人殺しじゃ。親殺しじゃ。」

いのくま おじ猪熊の爺は、相手の心を見通したのか、またひとしきりはね起きようとして、すまいながら、必死になって、わめき立てた。

「おぬしは、なんで阿濃を、あのような目にあわせた。さあそのしさいを言え。言わねば……」
「言う。言う。——言うがな。言ったあとでも、おぬしの事じゃ。殺さないものでも、なかろう。」

「うるさい。言うか、言わぬか。」

「言う。言う。言う。が、まず、そこを放してくれ。これでは、息がつまって、口がきけぬわ。」

太郎は、それを耳にもかけないように、殺気立った声で、いらだたく繰り返した。

「言うか、言わぬか。」

「言う。」と、いのくま おじ猪熊の爺は、声をふりしぼって、まだはね返そうと、もがきながら、「言うともな。あれはただ、わしが薬をのましようと思うたのじゃ。それを、あの阿濃の阿呆めが、どうしても飲みおらぬ。されば、ついわしも手荒な事をした。それだけじゃ。いや、まだある。薬をこしらえおったのは、おばばじゃ。わしの知った事ではない。」

「薬？ おろしぐすりでは、墮胎薬だ。いくら阿呆でも、いやがる者をつかまえて、非道な事をするおやじだ。」

「それ見い。言えと言うから、言え、なおおぬしは、わしを殺す気になるわ。人殺し。ごくどう極道。」

「たれがおぬしを殺すと言った？」

「殺さぬ気なら、なぜおぬしこそ、太刀の柄へ手をかけているのじゃ。」

老人は、汗にぬれたはげ頭を仰向けて、上目に太郎を見上げながら、口角に泡をためて、こう叫んだ。太郎は、はっと思った。殺すなら、今だという気が、心頭をかすめて、一閃する。彼は思わず、ひざに力を入れながら、太刀の柄を握りしめて、老人のうなじ頸のあたりをじっと見た。わずかに残った胡麻塩の毛が、後頭部を半ばおおった下に、二筋のけん腱が、赤い鳥肌の皮膚のしわを、そこだけ目立たないように、のばしている。——太郎は、そのうなじ頸を見た時に、不思議なれんびん憐憫を感じだした。

「人殺し。親殺し。うそつき。親殺し。親殺し。」

いのくま おじ

猪熊の爺は、つづけさまに絶叫しながら、ようやく、太郎のひざの下からはね起きた。はね起きると、すばやく倒れた遣戸やりどを小盾こだてにとって、きよろきよろ、目を左右にくばりながら、すきさえあれば、逃げようとする。——その一面に赤く地ばれのした、目も鼻もゆがんでいる、狡猾こうかつらしい顔を見ると、太郎は、今さらのように、殺さなかったのを後悔した。が、彼はおもむろに太刀の柄から手を離すと、彼自身をあわれむように苦笑をくちびるに浮かべながら、手近の古畳の上へしぶしぶ腰をおろした。

「おぬしを殺すような太刀は、持たぬわ。」

「殺せば、親殺しじゃて。」

いのくま おじ

やりど

彼の様子に安心した、猪熊の爺は、そろそろ遣戸やりどの後ろから、にじり出ながら、太郎のすわったのと、すじかに敷いた畳の上へ、自分も落ちつかない尻しりをすえた。

「おぬしを殺して、なんで親殺しになる？」

太郎は、目を窓にやりながら、吐き出すように、こう言った。四角に空を切りぬいた窓の中びわには、枇杷の木が、葉の裏表に日を受けて、明暗さまざまな緑の色を、ひっそりと風のないこずえにあつめている。

しゃきん

「親殺しじゃよ。——なぜと言えばな。沙金は、わしの義理の子じゃ。されば、つながるおぬしも、子ではないか。」

め

「じゃ、その子を妻めにしているおぬしは、なんだ。畜生かな、それともまた、人間かな。」

すいかん そで

老人は、さっきの争いに破れた、水干すいかんの袖そでを気にしながら、うなるような声で言った。

「畜生でも、親殺しはすまいて。」

太郎は、くちびるをゆがめて、あざわらった。

「相変わらず、達者な口だて。」

「何が達者な口じゃ。」

いのくま おじ

猪熊の爺は、急に鋭く、太郎の顔をにらめたが、やがてまた、鼻で笑いながら、「されば、おぬしにきくがな、おぬしは、このわしを、親と思うか。いやさ、親と思う事ができるかよ。」

「きくまでもないわ。」

「できまいな」

「おお、できない。」

しゃきん

「それが手前勝手じゃ。よいか。沙金はおばばのつれ子じゃよ。が、わしの子ではない。されば、おばばにつれそうわしが、沙金を子じゃと思わねばならぬなら、沙金につれそうおぬしも、わしを親じゃと思わねばなるまいがな。それをおぬしは、わしを親とも思わぬ。思わぬどころか、場合によっては、打ち打擲ちょうちやくもするではないか。そのおぬしが、わしにばかり、沙金を子と思えとは、どういうわけじゃ。妻めにして悪いとは、どういうわけじゃ。沙金を妻めにするわしが、畜生なら、親を殺そうとするおぬしも、畜生ではないか。」

老人は、勝ち誇った顔色で、しわだらけの人さし指を、相手につきつけるようにしながら、目をかがやかせて、しゃべり立てた。

「どうじゃ。わしが無理か、おぬしが無理か、いかなおぬしにも、このくらいな事はわかるであ

ろう。それもわしとおばばとは、まだわしが、左兵衛府の下人をしておったころからの昔なじみじゃ。おばばが、わしをどう思うたか、それは知らぬ。が、わしはおばばを懸想けそうしていた。」

太郎は、こういう場合、この酒飲みの、狡猾こうかつな、卑しい老人の口から、こういう昔語りを聞こうとは夢にも思っていなかった。いや、むしろ、この老人に、人並みの感情があるかどうか、それさえ疑わしいと、思っていた。懸想した猪熊の爺いのくま おじと懸想された猪熊のばばと、——太郎は、おのずから自分の顔に、一脈の微笑が浮かんで来るのを感じたのである。

「そのうちに、わしはおばばに情人おとこがある事を知ったがな。」

「そんなら、おぬしはきらわれたのじゃないか。」

「情人おとこがあったとて、わしのきらわれたという、証拠にはならぬ。話の腰を折るなら、もうやめじゃ。」

猪熊の爺は、真顔になって、こう言ったが、すぐまた、ひざをすすめて、太郎のほうへにじり寄りながら、つばをのみのみ、話しだした。

「そのうちに、おばばがその情人おとこの子をはらんだて。が、これはなんでもない。ただ、驚いたのは、その子を生むと、まもなく、おばばの行き方ゆ かたが、わからなくなって、しもうた事じゃ。人に聞けば、疫病えやみで死んだの、筑紫へ下ったのと言つくしいおるわ。あとで聞けば、なんの、奈良坂ならざかのしるべのもとへ、一時身を寄せておったげじゃ。が、わしは、それからにわかばくちに、この世が味気なくなつてしもうた。されば、酒も飲む、賭博も打つ。ついには、人に誘われて、まんまと強盗にさえ身をおとしたがな。綾あやを盗めば綾にしきにつけ、錦を盗めば、錦につけ、思い出すのは、ただ、おばばの事じゃ。それから十年たち、十五年たつて、やっとまたおばばに、めぐり会ってみれば——」

今では全く、太郎と一つ畳にすわりこんだ老人は、ここまで話すと、次第に感情がたかぶって来たせいか、しばらくはただ、涙ほおに頬をぬらしながら、口ばかり動かして、黙っている。太郎は、片目をあげて、別人を見るように、相手のベソをかいた顔をながめた。

「めぐり会ってみれば、おばばは、もう昔のおばばではない。わしも、昔のわしでなかったのじゃ。が、つれてくる子の沙金しゃきんを見れば、昔のおばばがまた、帰って来たかと思うほど、おもかげがよう似ている。されば、わしはこう思うた。今、おばばに別れば、沙金ともまた別れなければならぬ。もし沙金と別れまいと思えば、おばばといっしょになるばかりじゃ。よし、ならば、おばばを妻めにしよう——こう思い切って、持ったのが、この猪熊いのくまの瘦世帯やせじょたいじゃ。……」

猪熊の爺いのくま おじは、泣き顔を、太郎の顔のそばへ持って来ながら、涙声でこう言った。すると、その拍子に、今まで気づかなかつた、酒くさいにおいが、ぷんとする。——太郎は、あつけにとられて、扇のかげに、鼻をかくした。

「されば、昔からきょうの日まで、わしが命にかけて思うたのは、ただ、昔のおばば一人ぎりじゃ。つまりは今の沙金しゃきん一人ぎりじゃよ。それを、おぬしは、何かにつけて、わしを畜生じゃなどと言う。このおやじがおぬしは、それほど憎いのか。憎ければ、いっそ殺すがよい。今ここで、殺すがよい。おぬしに殺されれば、わしも本望じゃ。が、よいか、親を殺すからは、おぬ

しも、畜生じゃぞよ。畜生が畜生を殺す——これは、おもしろかろう。」

涙がかわくに從って、老人はまた、元のように、ふて腐れた悪態あくたいをつきながら、しわだらけの人さし指をふり立てた。

「畜生が畜生を殺すのじゃ。さあ殺せ。おぬしは、卑怯者ひきょうものじゃな。ははあ、さっき、わしが阿濃あこぎに菓をくれようとしたら、おぬしが腹を立てたのを見ると、あの阿呆あほうをはらませたのも、おぬしらしいぞ。そのおぬしが、畜生でのうて、何が畜生じゃ。」

こう言いながら、老人は、いちはやく、倒れた遣戸やりどの向こうへとびのいて、すわと言え、逃げようとするけはいを示しながら、紫がかった顔じゅうの造作ぞうさくを、憎々しくゆがめて見せる。——太郎は、あまりの雑言ぞうごんに堪えかねて、立ち上がりながら、太刀の柄たちへ手をかけたが、やめて、くちびるを急に動かすとたちまち相手の顔へ、一塊たんの痰をはきかけた。

「おぬしのような畜生には、これがちょうど、相当だわ。」

「畜生呼ばわりは、おいてくれ。沙金しゃきんは、おぬしばかりの妻めかよ。次郎殿の妻めでもないか。されば、弟の妻めをぬすむおぬしもやはり、畜生じゃ。」

太郎は、再びこのおやじを殺さなかった事を後悔した。が、同時にまた、殺そうという気の起けこる事を恐れもした。そこで、彼は、片目を火のようにひらめかせながら、黙って、席せきを蹴けって去ろうとする——すると、その後ろから、猪熊いのくまの爺おじはまた、指をふりふり、罵詈ばりを浴びせかけた。

「おぬしは、今の話をほんとうだと思ふか。あれは、みんなうそじゃ。ばばが昔なじみじゃというのも、うそなら、沙金がおばばに似ているというのもうそじゃ。よいか。あれは、みんなうそじゃ。が、とがめたくも、おぬしはとがめられまい。わしはうそつきじゃよ。畜生じゃよ。おぬしに殺されそくなつた、人でなしじゃよ。……」

老人は、こう唾罵だばを飛ばしながら、おいおい、呂律ろれつがまわらなくなって来た。が、なおも濁った目に懸命ぞうおの憎悪を集めながら、足を踏み鳴らして、意味のない事を叫びつづける。——太郎は、堪えがたい嫌悪けんおの情に襲われて、耳をおおうようにしながら、匆々そうそう、猪熊いのくまの家を出た。外には、やや傾きかかった日がさして、相変わらずその中を、燕つばくらが軽々と流れている。——「どこへ行こう。」

外へ出て、思わずこう小首を傾けた太郎は、ふとさっきまでは、自分が沙金しゃきんに会うつもりで、猪熊へ来たのに、気がついた。が、どこへ行ったら、沙金に会えるという、当てもない。

「ままよ。羅生門らしょうもんへ行つて、日の暮れるのでも待とう。」

彼のこの決心には、もちろん、いくぶん沙金に会えるという望みが、隠れている。沙金は、日ごろから、強盗にはいる夜には、好んで、男装束おとこしょうぞくに身をやつした。その装束や打ち物は、みな羅生門の楼上かわごに、皮子へ入れてしまつてある。——彼は、心をきめて、小路こうじを南へ、大またに歩きだした。

それから、三条を西へ折れて、耳敏川みみとがわの向こう岸を、四条まで下つてゆく——ちょうど、その

おおじ 四条の大路へ出た時の事である。太郎は、 いちちょう 一町 を隔てて、この大路を北へ、 りゅうほんじ ついじ 立本寺 の築土の
下を、話しながら通りかかる、二人の なんによ 男女 の姿を見た。

すいかん 朽ち葉色の 水干 とうす 紫の衣とが、影を二つ重ねながら、はればれした笑い声をあとに残して
こうじ 小路から 小路へ通りすぎる。めまぐるしい つばくら 燕 の中に、男の くるざや 黒鞆 の太刀が、きらりと日に光
ったかと思うと、二人はもう見えなくなった。

太郎は、額を曇らせながら、思わず道ばたに足をとめて、苦しそうにつぶやいた。
「どうせみんな畜生だ。」

よ い じょうこく
ふけやすい夏の夜は、早くも亥の 上刻 に迫って来た。――

月はまだ上らない。見渡す限り、重苦しいやみの中に、声もなく眠っている 京^{きょう}の町は、加茂^ま川の水面^{みのも}がかすかな星の光をうけて、ほのかに白く光っているばかり、大路小路^{つじつじ}の 辻々 にも、今はようやく灯影^{ほかげ}が絶えて、内裏^{だいり}といい、すすき原^{まちや}といい、町家^{まちや}といい、ことごとく、静かな夜空の下に、色も形もおぼろげな、ただ広い平面を、ただ、際限もなく広げている。それがまた、^{うきょうさきょう}右京左京 の 区別なく、どこも森閑と音を絶って、たまに耳にはいるのは、すじかいに声を飛ばすほととぎすのほかに、何も無い。もしその中に一点でも、人なつかしい火がゆらめいて、かすかなものの声が聞こえるとすれば、それは、香の煙のたちこめた大寺の内陣で、金泥^{だいじ}も 緑青^{きんてい}も ^{ろくしょう}も ところはだら ^{くじゃくみよおう}孔雀明王 の画像^{じょうとうみょう}を前に、常燈明^{さんろう}の光をたのむ 参籠^{さんろう}の人々か、さもなくば、四^{あくたび}条五条の橋の下で、短夜を 芥火^{あくとび}の影にぬすむ、こじき法師の群れであろう。あるいはまた、夜な夜な、往来の人をおびやかす朱雀門^{すざくもん}の 古狐^{ふるぎつね}が、瓦^{かわら}の上、草の間に、ともすともなくともすという、鬼火^{せんぼん}のたぐいであるかもしれない。が、そのほかは、北は 千本^{とば}、南の鳥羽街道^{さかい}の 境^{さかい}を尽くして、蚊やりの煙のにおいのする、夜色^{やしよく}の底に埋もれながら、河原^{かわら}よもぎの葉を動かす、微風もまるで知らないように、沈々としてふけている。

その時、王城^{すざくおおじ}の北、朱雀大路^{らしょうもん}のはずれにある、羅生門^{らしょうもん}のほとりには、時ならない弦打ちの音が、さながら 蝙蝠^{こうもり}の羽音のように、互いに呼びつ答えつして、あるいは一人、あるいは三人、あるいは五人、あるいは八人、怪しげないでたちをしたものの姿が、次第にどこからか、つどって来た。おぼつかない星明かりに透かして見れば、太刀^{たち}をはくもの、矢^やを負うもの、斧^{おの}を執るもの、^{ほこ}戟^{ほこ}を持つもの、皆それぞれ、^{えもの}得物^{はばきわろうず}に身を固めて、脛布^{はばきわろうず} 藁沓^{はばきわろうず}の装いもかいがいしく、門の前に渡した石橋へ、むらむらと集まって、列を作る――と、まっさきには、太郎がいた。それにつづいて、さっきの争いも忘れたように、猪熊^{いのくま}の爺^{おじ}が、物々しく銚^{ほこ}の先を、きらりと暗^{やみ}にひらめかせる。続いて、次郎^{いのくま}、猪熊^{いのくま}のばば、少し離れて、阿濃^{あこぎ}もいる。それにかこまれて、沙金^{しゃきん}は一人、黒い水干^{すいかん}に太刀^{たち}をはいて、胡縵^{やなくい}を背に 弓杖^{ゆんづえ}をつきながら、一同を見渡して、あでやかな口を開いた。――

「いいかい。今夜の仕事は、いつもより手ごわい相手なんだからね。みなそのつもりで、いておくれ。さしずめ十五六人は、太郎さんといっしょに、裏から、あとはわたしといっしょに、表^{うまや}からはいってもらおう。中でも目ぼしいのは、裏^{みちのくで}の 厩^{うまや}にいる陸奥出^{みちのくで}の馬だがね。これは、太郎さん、あなたに頼んでおくわ。よくって。」

太郎は、黙って星を見ていたが、これを聞くと、くちびるをゆがめながら、うなずいた。「それから断わっておくが、女子供を質になんぞとっては、いけないよ。あとの始末がめんどうだからね。じゃ、人数^{にんず}がそろったら、そろそろ出かけよう。」

こう言って、沙金は弓をあげて、一同をさしまねいたが、しょんぼり、指をかんで立っている

、阿濃を顧みると、またやさしくことばを添えた。

「じゃ、お前はここで、待っていておくれ。一刻^{いっとき}か二刻^{ふたとき}で、皆帰ってくるからね。」

阿濃は、子供のように、うっとり沙金の顔を見て、静かに合点^{がてん}した。

「されば、行こう。ぬかるまいぞ、多囊丸^{たじょうまる}。」

猪熊^{いのくま}の爺^{おじ}は、戟^{ほこ}をたばさみながら、隣にいる仲間をふり返った。蘇芳染^{すおうぞめ}の水干^{すいかん}を着た相手は、太刀のつばを鳴らして、「ふふん」と言ったまま、答えない。そのかわりに、斧^{おの}をかついだ、青ひげのさわやかな男が、横あいから、口を出した。

「おぬしこそ、また影法師なぞにおびえまいぞ。」

これと共に、二十三人の盗人どもは、ひとしく忍び笑いをもらしながら、沙金^{しゃきん}を中に、雨雲のむらがるごとく、一団の殺気をこめて、朱雀大路^{すざくおおじ}へ押し出すと、みぞをあふれた泥水^{どろみず}が、くぼ地くぼ地へ引かれるようにやみにまぎれて、どこへ行ったか、たちまちのうちに、見えなくなった

。……

あとには、ただ、いつか月しろのした、うす明るい空にそむいて、羅生門^{らしょうもん}の高い蔓^{いらか}が、寂然^{せきぜん}と大路を見おろしているばかり、またしてもほととぎすの、声がおちこちに断続して、今まで七丈五級の大石段に、たたずんでいた阿濃の姿も、どこへ行ったか、見えなくなった。——が、まもなく、門上の楼に、おぼつかない灯^{あこぎ}がともって、窓が一つ、かたりとあくど、その窓から、遠い月の出をながめている、小さな女の顔が出た。阿濃は、こうして、次第に明るくなってゆく京の町を、目の下に見おろしながら、胎児の動くのを感じるごとに、ひとりうれしそうに、ほほえんでいるのである。

次郎は、二人の侍と三頭の犬とを相手にして、血にまみれた太刀をふるいながら、小路を南へ二三町、下るともなく下って来た。今は沙金の安否を気づかっている余裕もない。侍は衆をたのんで、すきまもなく切りかける。犬も毛の逆立った背をそびやかして、前後をきらわず、飛びかかった。おりからの月の光に、往来は、ほのかながら、打つ太刀をたがわせないほどに、明るくなっている。——次郎は、その中で、人と犬とに四方を囲まれながら、必死になって、切りむすんだ。

相手を殺すか、相手に殺されるか、二つに一つより生きる道はない。彼の心には、こういう覚悟と共に、ほとんど常軌を逸した、凶猛な勇気が、刻々に力を増して来た。相手の太刀を受け止めて、それを向こうへ切り返ししながら、足もとを襲おうとする犬を、とっさに横へかわしてしまふ。——彼は、この働きをほとんど同時にした。そればかりではない。どうかするとその拍子に切り返した太刀を、逆にまわして、後ろから来る犬の牙を、防がなければならない事さえある。それでもさすがにいつか傷をうけたのであろう。月明かりにすかして見ると、赤黒いものが一すじ、汗ににじんで、左の小鬢から流れている。が、死に身になった次郎には、その痛みも気にならない。彼は、ただ、色を失った額に、ひいでた眉を一字にひそめながら、あたかも太刀に使われる人のように、烏帽子も落ち、水干も破れたまま、縦横に刃を交えているのである。

それがどのくらい続いたか、わからない。が、やがて、上段に太刀をふりかざした侍の一人が、急に半身を後ろへそらせて、けたたましい悲鳴をあげたと思うと、次郎の太刀は、早くもその男の脾腹を斜めに、腰のつがいまで切りこんだのであろう。骨を切る音が鈍く響いて、横に薙いだ太刀の光が、うすやみをやぶってきらりとする。——と、その太刀が宙におどって、もう一人の侍の太刀を、ちょうど下から払ったと見る間に、相手は肘をしたたか切られて、やにわに元来たほうへ、敗走した。それを次郎が追いつきざまに、切ろうとしたのと、狩犬の一頭が鞠のように身はずませて、彼の手もとへかぶりついたのが、ほとんど、同時の働きである。彼は、一足あとへとびのきながら、ふりむかった血刀の下に、全身の筋肉が一時にゆるむような気落ちを感じて、月に黒く逃げてゆく相手の後ろ姿を見送った。そうしてそれと共に、悪夢からさめた人のような心もちで、今自分のいる所が、ほかならない立本寺の門前だという事に気がついた。

これから半刻ばかり以前の事である。藤判官の屋敷を、表から襲った偷盗の一群は、中門の右左、車宿りの内外から、思いもかけず射出した矢に、まず肝を破られた。まっさきに進んだ真木島の十郎が、太腿を篋深く射られて、すべるようにどうと倒れる。それを始めとして、またたく間に二三人、あるいは顔を破り、あるいは臂を傷つけて、あわただしく後ろを見せた。射手の数は、もちろん何人だかわからない。が、染め羽白羽のとがり矢は、中には物々しい鏑の音さえ交えて、またひとしきり飛んで来る。後ろに下がっていた沙金でさえ、ついには黒い水干の袖を斜めに、流れ矢に射通された。

かしら
「お頭 にかがをさすな。射る。射る。味方の矢にも、鏃 があるぞ。」

かたの へいろく おの え
交野の平六が、斧の柄をたたいて、こうののしると、「おう」という答えがあって、たちまち
盗人の中からも、また矢叫びの音が上がり始める。太刀の柄に手をかけて、やはり後ろに下がっ
ていた次郎は、平六のこのことばに、一種の苛責を感じながら、見ないようにして沙金の顔を横
からそっとのぞいて見た。沙金は、この騒ぎのうちにも冷然とたたずみながら、ことさら月の光
にそむきいて、弓杖をついたまま、口角の微笑もかくさず、じっと矢の飛びかうのを、ながめて
いる。——すると、平六が、またいら立たしい声を上げて、横あいから、こう叫んだ。

「なぜ十郎を捨てておくのじゃ。おぬしたちは矢玉が恐ろしゅうて、仲間を見殺しにする気
かよ。」

ふともも たち つえ
太腿を縫われた十郎は、立ちたくも立てないのであろう、太刀を杖にして居ざりながら、ちょ
うど羽根をぬかれた 鴉 のように、矢を避け避け、もがいている。次郎は、それを見ると、異様
な戦慄を覚えて、思わず腰の太刀をぬき払った。が、平六はそれを知ると、流し目にじろりと彼の
顔を見て、

かしら こぬすびと
「おぬしは、お頭に付き添うていればよい。十郎の始末は、小盗人でたくさんじゃ。」と、あ
ざけるように言い放った。

ぶべつ
次郎は、このことばに皮肉な侮蔑を感じて、くちびるをかみながら、鋭く平六の顔を見返
した。——すると、ちょうどそのとたんである。十郎を救おうとして、ばらばらと走り寄った、
盗人たちの機先を制して、耳をつんざく 一声の角を合図に、粉々として乱れる矢の中を、門の
内から耳のとがった、牙の鋭い、狩犬が六七頭すさまじいうなり声を立てながら、夜目にも白く
ほこりを巻いて、まっしぐらに衝いて出た。続いてそのあとから十人十五人、手に手に打ち物
を取った侍が、先を争って屋敷の外へ、ひしめきながらあふれて来る。味方ももちろん、見ては
いない。斧をふりかざした平六を先に立てて、太刀や鉾が林のように、きらめきながら並んだ中
から、人とも 獣ともつかない声を、たれとも知らずわっと上げると、始めのひるんだけしき
にも似ず一度に備えを立て直して、猛然として殺到する。沙金も、今は弓にたかうすびょうの矢を
つがえて、まだ微笑を絶たない顔に、一脈の殺気を浮かべながら、すばやく道ばたの築土のこわ
れを小楯にとって、身がまえた。——

やがて敵と味方は、見る見るうちに一つになって、気の違ったようにわめきながら、十郎の倒
れている前後をめぐる、無二無三に打ち合い始めた。その中にまた、狩犬がけたたましく、血
に飢えた声を響かせて、戦いはいずれが勝つとも、しばらくの間はわからない。そこへ一人、裏
へまわった仲間の一人が、汗と埃とにまみれながら、二三か所薄手を負うた様子で、血に染ま
ったままかけつけた。肩にかついだ太刀の刃のこぼれでは、このほうの戦いも、やはり存外手
痛かったらしい。

「あっちは皆ひき上げますぜ。」

その男は、月あかりにすかしながら、沙金の前へ来ると、息を切らし切らし、こう言った。

「なにしろ肝腎の太郎さんが、門の中で、やつらに囲まれてしまったという騒ぎでしてな。」

沙金と次郎とは、うす暗い築土の影の中で、思わず目と目を見合わせた。

「囲まれて、どうしたえ。」

「どうしたか、わかりません。が、事によると、——まあそれもあの人の事だから、万々大丈夫だろうと思いたすがな。」

次郎は、顔をそむけながら、沙金のそばを離れた。が、小盗人はもちろんそんな事は、気にとめない。

「それにおじじやおばばまで、手を負ったようでした。あのぶんじゃ殺されたやつも、四五人はありましよう。」

沙金はうなずいた。そうして次郎のあとから追いかけるように、陰のある声で、
「じゃ、わたしたちもひき上げましよう。次郎さん、口笛を吹いてちょうだい。」と言った。

次郎は、あらゆる表情が、凝り固まったような顔をしながら、左手の指を口へ含んで、鋭く二声、口笛の音を飛ばせた。これが、仲間にだけ知られている、引き揚げの時の合図である。が

、盗人たちは、この口笛を聞いても、踵をめぐらす様子がない。(実は、人と犬とにとりかこまれてめぐらすだけの余裕がなかったせいであろう。)口笛の音は、蒸し暑い夜の空気を破って

、むなしく小路の向こうに消えた。そうしてそのあとには、人の叫ぶ声と、犬のほえる声と、それから太刀の打ち合う音とが、はるかな空の星を動かして、いっそう騒然と、立ちのぼった。

沙金は、月を仰ぎながら、稲妻のごとく眉を動かした。

「しかたがないわね。じゃ、わたしたちだけ帰りましよう。」

そういう話のまだ終わらないうちに、そうして、次郎がそれを聞かないもののように、再び指を口に含んで相図を吹こうとした時に、盗人たちの何人かが、むらむらと備えを乱して、左右へ分かれた中から、人と犬とが一つになって、二人の近くへ迫って来た。——と思うと、沙金の手

に弓返りの音がして、まっさきに進んだ白犬が一頭、たかうすびょうの矢に腹を縫われて、苦鳴

と共に、横に倒れる。見る間に、黒血がその腹から、斑々として砂にたれた。が、犬に続いた一人の男は、それにもおじず、太刀をふりかざして、横あいから次郎に切ってかかる。その太刀が

、ほとんど無意識に受けとめた、次郎の太刀の刃を打って、鏘然とした響きと共に、またたく

間、火花を散らした。——次郎はその時、月あかりに、汗にぬれた赤ひげと切り裂かれた

樺桜の直垂とを、相手の男に認めたのである。

彼は直下に、立本寺の門前を、ありありと目に浮かべた。そうして、それと共に、恐ろしい疑惑が、突然として、彼を脅かした。沙金はこの男と腹を合わせて、兄のみならず、自分をも殺そ

うとするのではあるまいか。一髪の間にか、こういう疑いをいだいた次郎は、目の前が暗くなるよう

な怒りを感じて、相手の太刀の下を、脱兎のごとく、くぐりぬけると、両手に堅く握った太刀を、奮然として、相手の胸に突き刺した。そうして、ひとたまりもなく倒れる相手の男の顔を、し

たたか藁沓でふみにじった。

彼は、相手の血が、生暖かく彼の手にかかったのを感じた。太刀の先が^{あばら}肋の骨に触れて、強い抵抗を受けたのを感じた。そうしてまた、断末魔の相手が、^{わろうず}心みつけた彼の^{ふくしゅうしん}復讐心に、快い刺激を与えたのは、もちろんである。が、それにつれて、彼はまた、ある名状しがたい心の疲労に、襲われた。もし周囲が周囲だったら、彼は必ずそこに身を投げ出して、飽くまで休息をむさぼった事であろう。しかし、彼が相手の顔を心みつけて、血のしたたる太刀を向こうの胸から引きぬいているうちに、もう何人かの侍は、四方から彼をとり囲んだ。いや、すでに後ろから、忍びよった男の^{ほこ}鋒は、^{きつさき}危うく^{すいかん}鋒を、^{そで}彼の背に擬している。が、その男は、不意に前へよろめくと、^{さつぜん}鋒の先に次郎の水干の袖を裂いて、うつむけに^{のぶか}がくりと倒れた。たかうすびょうの矢が一筋、^{さつぜん}颯然と風を切りながら、ひとゆりゆって後頭部へ、ぐさと^{のぶか}篋深く立ったからである。

それからのちの事は、次郎にも、まるで夢のようにしか思われぬ。彼はただ、前後左右から落ちて来る^{たち}太刀の中に、獣のようなり声を出して、相手を選まず渡り合った。周囲に沸き返っている、声とも音ともつかない物の響きと、その中に出没する、血と汗とにまみれた人の顔と——そのほかのものは、何も目にはいらぬ。ただ、さすがに、あとにのこして来た^{しゃきん}沙金の事が、太刀からほとばしる火花のように、時々心にひらめいた。が、ひらめいたと思ううちに、刻々迫ってくる生死の危急が、たちまちそれをかき消してしまう。そうして、そのあとにはまた、太刀音と矢たけびとが、^{いなご}天をおおう^{ついで}蝗の羽音のように、^{こうじ}築土にせかれた小路の中で、とめどもなくわき返った。——次郎は、こういう勢いに促されて、いつか二人の侍と三頭の犬とに追われながら、小路を南へ少しずつ切り立てられて来たのである。

が、相手の一人を殺し、一人を追いはらったあとで、犬だけなら、恐れる事もないと思ったのは、結局次郎の空だのみにすぎなかった。犬は三頭が三頭ながら、大きさも毛なみも一対な茶^{いちもつ}まだらの逸物で、子牛もこれにくらべれば、大きい事はあっても、小さい事はない。それが皆、口のまわりを人間の血にぬらして、前に変わらず彼の足もとへ、左右から襲いかかった。一頭の^{あご}頤を^{けかえ}蹴返すと、一頭が肩先へおどりかかる。それと同時に、一頭の^{きば}牙が、^{たち}すんでに太刀を持った手を、^{ともえ}かもうとした。とまた、三頭とも^{ともえ}巴のように、彼の前後に輪を描いて、尾を空ざまに上げながら、砂のにおいがかぐように、^{あご}頤を前足へすりつけて、びょうびょうとほえ立てる。——^{しゅうね}相手を殺したのに、気のゆるんだ次郎は、前よりもいっそう、この狩犬の^{しゅうね}執拗い働きに悩まされた。

しかも、いら立てば立つほど、彼の打つ太刀は^{くう}皆空を切って、ややともすれば、足場を失わせようとする。犬は、そのすきに乗じて、熱い息を吐きながら、いよいよ休みなく肉薄した。もうこうなっては、ただ、窮余の一策しか残っていない。そこで、彼は、事によったら、犬が追いあぐんで、どこかに逃げ場ができるかもしれないという、^{いちる}一縷の望みにたよりながら、打ちはずした太刀を引いて、おりから足をねらった犬の背を危うく向こうへとび越えると、月の光をたよりにして、ひた走りに走り出した。が、もとよりこの企ても、^{わら}しよせんはおぼれようとするものが、^{わら}藁でもつかむのと変わりはない。犬は、彼が逃げるのを見ると、ひとしくきりりと尾を巻いて

、あと足に砂を蹴上げながら真一文字に追いすがった。

が、彼のこの企ては、単に失敗したというだけの事ではない。実はそれがために、かえって
ここう
虎口にはいるような事ができたのである。——次郎は立本寺の辻をきわどく西へ切れて、もの
りゅうほんじ つじ
の二町と走るか走らないうちに、たちまち行く手の夜を破って、今自身を追っている犬の声より
しら こうじ
、より多くの犬の声が、耳を貫ぬいて起こるのを聞いた。それから、月に白んだ小路をふさいで
えじき
、黒雲に足のはえたような犬の群れが、右往左往に入り乱れて、餌食を争っているさまが見えた
最後に——それはほとんど寸刻のいとまもなかったくらいである。すばやく彼を駆けぬけた狩
犬の一頭が、友を集めるように高くほえると、そこに狂っていた犬の群れは、ことごとく相呼び
ぎんぎん
相答えて、一度に言々の声をあげながら、見る間に彼を、その生きて動く、なまぐさい毛皮の
うずま
渦巻きの中へ巻きこんだ。深夜、この小路に、こうまで犬の集まっていたのは、もとよりいつも
ある事ではない。次郎は、この廃都をわが物顔に、二十と頭をそろえて、血のにおいに飢えて
どうもう えやみ よい
歩く、獯猛な野犬の群れが、ここに捨ててあった疫病の女を、宵のうちから餌食にして、互い
きば
に牙をかみながら、そのちぎれちぎれな肉や骨を、奪い合っているところへ、来たのである。

犬は、新しい餌食を見ると、一瞬のいとまもなく、あらしに吹かれて飛ぶ稲穂のように、八方
から次郎へ飛びかかった。たくましい黒犬が、太刀の上をおどり越えると、尾のない狐に似た
たち きつね
犬が、後ろから来て、肩をかすめる。血にぬれた口ひげが、ひやりと頬にさわったかと思うと、
ほお
砂だらけな足の毛が、斜めに眉の間をなでた。切ろうにも突こうにも、どれと相手を定める事が
まゆ
できない。前を見ても、後ろを見ても、ただ、青くかがやいている目と、絶えずあえいでいる口
とがあるばかり、しかもその目とその口が、数限りもなく、道をうずめて、ひしひしと足もと
に迫って来る。——次郎は、太刀を回しながら、急に、猪熊のばばの話を思い出した。「どうせ
いのくま
死ぬのなら一思いに死んだほうがいい。」彼は、そう心に叫んで、いさぎよく目をつぶったが、
のど
喉をかもうとする犬の息が、暖かく顔へかかると、思わずまた、目をあいて、横なぐりに太刀を
ふるった。何度それを繰り返したか、わからない。しかし、そのうちに、腕の力が、次第に衰え
て来たのであろう、打つ太刀が、一太刀ごとに重くなった。今では踏む足さえ危うくなった。そ
こへ、切った犬の数よりも、はるかに多い野犬の群れが、あるいは芒原の向こうから、あるい
すすきはら
は築土のこわれをぬけて、続々として、つどって来る。——

次郎は、絶望の目をあげて、天上の小さな月を一瞥しながら、太刀を両手にかまえたまま、兄
いちべつ
の事や沙金の事を、一度に石火のごとく、思い浮かべた。兄を殺そうとした自分が、かえって犬
しゃきん せつか
に食われて死ぬ。これより至極な天罰はない。——そう思うと、彼の目には、おのずから涙が浮
しごく
かんだ。が、犬はその間も、用捨はしない。さっきの狩犬の一頭が、ひらりと茶まだらな尾を
ふもも きば
ふるったかと思うと、次郎はたちまち左の太腿に、鋭い牙の立ったのを感じた。

するとその時である。月にほのめいた両京二十七坊の夜の底から、かまびすしい犬の声を押し
かつかつ ばてい
てはるかに蔓々たる馬蹄の音が、風のように空へあがり始めた。……

しかしその間も阿濃^{あこぎ}だけは、安らかな微笑を浮かべながら、羅生門^{らしょうもん}の楼の上にたたずんで、遠く月の出をながめている。東山の上が、うす明るく青んだ中に、ひでりにやせた月は、おもむろにさみしく、中空^{なかぞら}に上ってゆく。それにつれて、加茂川にかかっている橋が、その白々とし^{しらじら}た水光^{すずびか}りの上に、いつか暗く浮き上がって来た。

ひとり加茂川ばかりではない。さっきまでは、目の下に黒く死人^{しびと}のおいを蔵していた京の町も、わずかの間に、つめたい光の鍍金^{めっき}をかけられて、今では、越^{こし}の国の人が見るとい^かいう蜃気楼^{かいやぐら}のように、塔の九輪^{がらん}や伽藍の屋根を、おぼつかなく光らせながら、ほのかな明るみと影との中に、あらゆる物象を、ぼんやりとつつんでいる。町をめぐる山々も、日中のほとぼりを返しているのであろう、おのずから頂きをおぼろげな月明かりにぼかしながら、どの峰も、じっと物を思っ^もてでもいるように、うすい靄^{もや}の上から、静かに荒廃した町を見おろしている——と、その中で、かすかに凌霄花^{のうぜんかずら}のおいがした。門の左右を埋める藪^{うず}のところどころから、簇々^{やぶ}とつるをのばしたその花が、今では古びた門の柱にまといついで、ずり落ちそうになった瓦^{かわら}の上や、蜘蛛^{くも}の巣^{たるき}をかけた楹^{たい}の間へ、はい上がったのがあるからであろう。……

窓によりかかった阿濃^{あこぎ}は、鼻の穴を大きくして、思い入れ凌霄花のおいを吸いながら、なつかしい次郎の事を、そうして、早く日の目を見ようとして、動いている胎児の事を、それからそれへと、とめどなく思いつづけた。——彼女は双親^{ふたおや}を覚えていない。生まれた所の様子さえ、もう全く忘れている。なんでも幼い時に一度、この羅生門^{らしょうもん}のような、大きな丹塗りの門の下を、たれかに抱くか、負われかして、通ったという記憶がある。が、これももちろん、どのくらいほんとうだか、確かな事はわからない。ただ、どうにかこうにか、覚えているのは、物心がついてからのちの事ばかりである。そうして、それがまた、覚えていないほうがよかったと思うような事ばかりである。ある時は、町の子供にいじめられて、五条の橋の上から河原へ、さかさまにつき落^ととされた。ある時は、飢えにせまってした盗^{とが}みの咎^{うつぱり}で、裸のまま、地藏堂の梁^{りやう}へつり上げられた。それがふと沙金^{しゃきん}に助けられて、自然とこの盗人の群れにはいったが、それでも苦しい目にあう事は、以前と少しも変わりがない。白痴に近い天性を持って生まれた彼女にも、苦しみを、苦しみとして感じる心はある。阿濃^{あこぎ}は猪熊^{いのくま}のばばの気に逆らっては、よくむごたらしく打擲^{ちやうちやく}された。猪熊^{おじ}の爺^{おじ}には、酔った勢いで、よく無理難題を言いかけられた。ふだんは何かといたわってくれる沙金^{しゃきん}でさえ、癩^{かん}にさわると、彼女の髪の毛をつかんで、ずるずる引きずりまわす事がある。まして、ほかの盗人たちは、打つにもたたくにも、用捨はない。阿濃は、そのたびにいつ^{らしょうもん}もこの羅生門の上へ逃げて来ては、ひとりでしくしく泣いていた。もし次郎が来なかったら、そうして時々、やさしいことばをかけてくれなかったら、おそらくとうにこの門の下へ身を投げて、死んでしまっていた事であろう。

煤^{すす}のようなものが、ひらひらと月にひるがえって、藁^{いらか}の下から、窓の外をうす青い空へ上が

った。言うまでもなく蝙蝠である。阿濃は、その空へ目をやって、まばらな星に、うっとりとながめ入った。——するとまたひとしきり、腹の子が、身動きをする。彼女は急に耳をすますようにして、その身動きに気がつけた。彼女の心が、人間の苦しみをのがれようとして、もがくように、腹の子はまた、人間の苦しみを^な嘗めに来ようとして、もがいている。が、阿濃は、そんな事は考えない。ただ、母になるという喜びだけが、そうして、また、自分も母になれるという喜びだけが、この^{のうぜんかずら}凌霄花のにおいのように、さっきから彼女の心をいっぱいになっているからである。

そのうちに、彼女はふと、胎児が動くのは、眠れないからではないかと思いだした。事によると、眠られないあまりに、小さな手や足を動かして、泣いてでもいるのかもしれない。「坊やはいいい子だね。おとなしく、ねんねしておいで、今にじき夜が明けるよ。」——彼女は、こう胎児にささやいた。が、腹の中の身動きは、やみそう^{あこぎ}で、容易にやまない。そのうちに痛みさえ、どうやら少しずつ加わって来る。阿濃は、窓を離れて、その下にうずくまりながら、結び燈台の^ひうす暗い灯にそむいて、腹の中の子を慰めようと、細い声で歌をうたった。

君をおきて
あだし心を
われ持たばや
なよや、末の松山
波も越えなむや
波も越えなむ

うろ覚えに覚えた歌の声は、^ひ灯のゆれるのに従って、ふるえふるえ、しんとした楼の中に断続した。歌は、次郎が好んでうたう歌である。酔うと、彼は必ず、扇で拍子をとりながら、目をねむって、何度もこの歌をうたう。沙金^{しゃきん}はよく、その節回しがおかしいと言って、手を打って笑った。——その歌を、腹の中の子が、喜ばないというはずはない。

しかし、その子が、^{たね}実際次郎の胤かどうか、それは、たれも知っているものがない。阿濃自身も、この事だけは、全く口をつぐんでいる。たとえ盗人たちが、意地悪く子の親を問いつめ^{あこぎ}ても、彼女は両手を胸に組んだまま、はずかしそうに目を伏せて、いよいよ^{しゅうね}執拗く黙ってしまう。そういう時は、必ず^{あか}垢じみた彼女の顔に女らしい血の色がさして、いつか^{まつげ}睫毛にも、涙がたまって来る。盗人たちは、それを見ると、ますます何かとはやし立てて、腹の子の親さえ知らない^{あほう}、阿呆な彼女をあざわらった。が、阿濃は胎児が次郎の子だという事を、かたく心の中で信じている。そうして、自分の恋している次郎の子が、自分の腹にやどるのは、当然な事だと信じている。この楼の上で、ひとりさびしく寝るごとに、必ず夢に見るあの次郎が、親でなかったとしたならば、たれがこの子の親であろう。——阿濃は、この時、歌をうたいながら、遠い所を見るような目をして、蚊に刺されるのも知らずに、うつつながら夢を見た。人間の苦しみを忘れた、しかもまた人間の苦しみに色づけられた、うつくしく、いたましい夢である。（涙を知らないものを見る事ができる夢ではない。）そこでは、いっさいの悪が、眼底を払って、消えてしまう。が、人間の悲しみだけは、——空をみたしている月の光のように、大きな人間の悲しみだけは、やはりさびしくおごそかに残っている。……

なよや、末の松山

波も越えなむや

波も越えなむ

歌の声は、ともし火の光のように、次第に細りながら消えていった。そうして、それと共に、力のない呻吟しんぎんのやみ声が、暗を誘うごとく、かすかにもれ始めた。阿濃は、歌の半ばで、突然下腹あこぎに、鋭い疼痛とうつうを感じ出したのである。

相手の用意に裏をかかれた盗人の群れは、裏門を襲った一隊も、防ぎ矢に射し込まされたのを始めとして、中門ちゅうもんを打って出た侍たちに、やはり手痛い逆撃さかうちをくらわせられた。たかが青侍の腕だてと思いついていた先手の何人かも、算を乱しながら、背そびらを見せる——中でも、臆病おくびょうな猪熊いのくまの爺おじは、たれよりも先に逃げかかったが、どうした拍子か、方角を誤って、太刀をぬきつれた侍たちのただ中へ、はいるともなく、はいってしまった。酒肥さかぶとりした体格と言ひ、物々しくほこ銚をひっさげた様子と言ひ、ひとかど手なみのすぐれたものと、思われでもしたのであろう。侍たちは、彼を見ると、互いに目くばせをかわしながら、二人三人、鋒きつさきをそろえたまま、じりじり前後から、つめよせて来た。

「はやるまいぞ。わしはこの殿けにんの家人じゃ。」

猪熊いのくまの爺おじは、苦しまぎれにあわただしくこう叫んだ。

「うそをつけ。——おのれにたばかれるような阿呆あほうと思うか。——往生しびとぎわの悪いおやじじゃ。」

侍たちは、口々にののしりながら、早くも太刀を打ちかけようとする。もうこうなっては、逃げようとしても逃げられない。猪熊の爺の顔は、とうとう死人のような色になった。

「何がうそじゃ。何がうそじゃよ。」

彼は、目を大きくして、あたりをしきりに見回しながら、逃げ場はないかと気をあせった。額には、つめたい汗がわいて来る。手もふるえが止まらない。が、周囲は、どこを見ても、むごたらしい生死の争いが、盗人と侍との間に戦われているばかり、静かな月の下ではあるが、はげしい太刀音と叫喚たちおとの声とが、一塊ひとかたまりになった敵味方の中から、ひっきりなしにあがって来る。——しよせん逃げられないとさとした彼は、目を相手の上にすえると、たちまち別人のように、凶悪なけしきになって、上下の齒をむき出しながら、すばやく銚をかまえて、威丈高いたけだかにののしった。

「うそをついたがどうしたのじゃ。阿呆あほう。外道げどう。畜生。さあ来い。」

こう言うことばと共に、銚の先からは、火花が飛んだ。中でも屈竟くつきょうな、赤あざのある侍が一人、衆に先んじてかたわらから、無二無三に切っかけてかかったのである。が、もとより年をとった彼が、この侍の相手になるわけではない。まだ十合じゅうごうと刃を合わせないうちに、見る見る、銚先がしどろになって、次第にあとへ下がってゆく。それがやがて小路のまん中まで、切り立てられ

て来たかと思うと、相手は、大きな声を出して、彼が持っていたほこ え鉾の柄を、みごとに半ばから、
切り折った。と、また一太刀、今度は、右の肩先から胸へかけて、ひとたち袈裟がけに浴びせかける。
いのくま おじ しりい猪熊の爺は、尻居に倒れて、とび出しそうに大きく目を見ひらいたが、急に恐怖と苦痛とに堪え
られなくなったのであろう、あわてて高這いに這いのきながら声をふるわせて、わめき立てた。
「だまし討ちじゃ。だまし討ちを、食らわせおった。助けてくれ。だまし討ちじゃ。」

赤あざの侍は、その後ろからまた、のび上がって、血に染んだ太刀をふりかざした。その時
もし、どこからかさる猿のようなものが、走って来て、かたびら すそ帷子の裾を月にひるがえしながら、彼らの
中へとびこまなかったとしたならば、いのくま おじ猪熊の爺は、すでに、あえない最後を遂げていたのに相違
ない。が、そのさる猿のようなものは、彼と相手との間を押しへだてると、とっさに小刀をひらめか
して、相手の乳の下へ刺し通した。そうして、それとともに、相手の横に払った太刀をあびて、
恐ろしい叫び声を出しながら、焼け火箸でも踏んだように、勢いよくとび上がると、そのまま、
向こうの顔へしがみついて、二人いっしょにどうと倒れた。

それから、二人の間には、ほとんど人間とは思われない、猛烈なつかみ合いが、始まった。
打つ。か噛む。髪をむしる。しばらくは、どちらがどちらともわからなかったが、やがて、猿のよ
うなものが、上になると、再び小刀がきらりと光って、組みしかれた男の顔は、あざ痣だけ元のように
赤く残しながら、見ているうちに、色が変わった。すると、相手もそのまま、力が抜けたのか
、侍の上へ折り重なって、仰向けにぐたりとなる——その時、始めて月の光にぬれながら、息も
絶え絶えにあえいでいる、しわだらけの、ひき墓に似た、猪熊のばばの顔が見えた。

老婆は、肩で息をしながら、侍の死体の上に横たわって、まだ相手のもとどり髻をとらえた、左の手
もゆるめずに、しばらくは苦しそうな呻吟の声をつぶけていたが、やがて白い目を、ぎょろりと
一つ動かすと、ひ干からびたくちびるを、二三度無理に動かして、

「おじいさん。おじいさん。」と、かすかに、しかもなつかしように、自分の夫を呼びかけた。
が、たれもこれに答えるものはない。いのくま おじ猪熊の爺は、老女の救いを得ると共に、打ち物も何も投
げすてて、こけつまるびつ、血にすべりながら、いち早くどこかへ逃げてしまった。そのあとに
ももちろん、何人かの盗人たちは、こうじ小路のそこそこに、えもの得物をふるって、必死の戦いをつづけて
いる。が、それらは皆、この垂死の老婆にとって、相手の侍と同じような、行路の人に過ぎない
のであろう。——猪熊のばばは、次第に細ってゆく声で、何度となく、夫の名を呼んだ。そう
して、そのたびに、答えられないさびしさを、負っている傷の痛みよりも、より鋭く味わわさ
れた。しかも、刻々衰えて行く視力には、次第に周囲の光景が、ぼんやりとかすんで来る。ただ
、自分の上にひろがっている大きな夜の空と、その中にかかっている小さな白い月と、それより
ほかのものは、何一つはつきりとわからない。

「おじいさん。」

老婆は、血の交じった唾を、口の中にためながら、つばささやくようにこう言うと、それなりこうこつ恍惚
とした、失神の底に、——おそらくは、さめる時のない眠りの底に、こんこん昏々として沈んで行った。

その時である。太郎は、そこを栗毛の裸馬にまたがって、血にまみれた太刀を、口にくわえながら、両の手に手綱をとって、あらしのように通りすぎた。馬は言うまでもなく、沙金が目をつけた、陸奥出の三才駒であろう。すでに、盗人たちがちりぢりに、死人を残して引き揚げた小路は、月に照らされて、さながら霜を置いたようにうす白い。彼は、乱れた髪を微風に吹かせながら、馬上に頭をめぐらして、後にのしり騒ぐ人々の群れを、誇らかにながめやった。

それも無理はない。彼は、味方の破れるのを見ると、よしや何物を得なくとも、この馬だけは奪おうと、かたく心に決したのである。そうして、その決心どおり、葛巻きの太刀をふるいふるい、手に立つ侍を切り払って、単身門の中に踏みこむと、苦もなく厩の戸を蹴破って、この馬の羈綱を切るより早く、背に飛びのる間も惜しいように、さえぎるものをひづめにかけて、いっさんに宙を飛ばした。そのために受けた傷も、もとより数えるいとまはない。水干の袖はちぎれ、烏帽子はむなしく紐をとどめて、ずたずたに裂かれた袴も、なまぐさい血潮に染まっている。が、それも、太刀と鉾との林の中から、一人に会えば一人を切り、二人に会えば二人を切って、出て来た時の事を思えば、うれしくこそあれ、惜しくはない。——彼は、後ろを見返り見返り、晴れ晴れした微笑を、口角に漂わせながら、昂然として、馬を駆った。

彼の念頭には、沙金がある。と同時にまた、次郎もある。彼は、みずから欺く弱さをしかりながら、しかもなお沙金の心が再び彼に傾く日を、夢のように胸に描いた。自分でなかったなら、たれがこの馬をこの場合、奪う事ができるだろう。向こうには、人の和があった。しかも地の利さえ占めている。もし次郎だったとしたならば——彼の想像には、一瞬間の間、侍たちの太刀の下に、切り伏せられている弟の姿が、浮かんだ。これは、もちろん、彼にとって、少しも不快な想像ではない。いやむしろ彼の中にあるある物は、その事実である事を、祈りさえした。自分の手を下さずに、次郎を殺す事ができるなら、それはひとり彼の良心を苦しめずにすむばかりではない。結果から言えば、沙金がそのために、自分を憎む恐れもなくなってしまう。そう思いながらも、彼は、さすがに自分の卑怯を恥じた。そうして口にくわえた太刀を、右手にとって、おもむろに血をぬぐった。

そのぬぐった太刀を、ちょうど鞆におさめた時である。おりから辻を曲がった彼は、行く手の月の中に、二十と言わず三十と言わず、群がる犬の数を尽くして、びょうびょうとほえ立てる声を聞いた。しかも、その中にただ一人、太刀をかざした人の姿が、くずれかかった築土を背負って、おぼろげながら黒く見える。と思う間に、馬は、高くいななきながら、長い鬣をさっと振ると、四つの蹄に砂煙をまき上げて、またたく暇に太郎をそこへ疾風のように持って行った。

「次郎か。」

太郎は、我を忘れて、叫びながら、険しく眉をひそめて、弟を見た。次郎も片手に太刀をかざしながら、項をそらせて、兄を見た。そうして刹那に二人とも、相手の瞳の奥にひそんで

いる、恐ろしいものを感じ合った。が、それは、文字どおり刹那である。馬は、吠えたける犬の群れに、脅かされたせいであろう、首を空ざまにつとあげると、前足で大きな輪をかきながら、前よりもすみやかに、空へ跳った。あとには、ただ、濛々としたほこりが、夜空に白く、ひとしきり柱になって、舞い上がる。次郎は、依然として、野犬の群れの中に、傷をこうむったまま、立ちすくんだ。……

太郎は——一時に、色を失った太郎の顔には、もうさっきの微笑の影はない。彼の心の中では、何ものかが、「走れ、走れ」とささやいている。ただ、一時、ただ、半時、走りさえすれば、それで万事が休してしまう。彼のする事を、いつかしなくてはならない事を、犬が代わってしてくれるのである。

「走れ、なぜ走らない？」ささやきは、耳を離れない。そうだ。どうせいつかしなくてはならない事である。おそいと早いとの相違がなんであろう。もし弟と自分の位置を換えたにしても、やはり弟は自分のしようとする事をするに違いない。「走れ。羅生門は遠くはない。」太郎は、片目に熱を病んだような光を帯びて、半ば無意識に、馬の腹を蹴った。馬は、尾と鬣とを、長く風になびかせながら、ひづめに火花を散らして、まっしぐらに狂奔する。一町二町月明かりの小路は、太郎の足の下で、急湍のように後ろへ流れた。

するとたちまちまた、彼のくちびるをついて、なつかしいことばが、あふれて来た。「弟」である。肉身の、忘れる事のできない「弟」である。太郎は、かたく手綱を握ったまま、血相を変えて歯がみをした。このことばの前には、いっさいの分別が眼底を払って、消えてしまう。弟か沙金かの、選択をしいられたわけではない。直下にこのことばが電光のごとく彼の心を打ったのである。彼は空も見なかった。道も見なかった。月はなおさら目にはいらなかった。ただ見たのは、限りない夜である。夜に似た愛憎の深みである。太郎は、狂気のごとく、弟の名を口外に投げると、身をのけざまに翻して、片手の手綱を、ぐいと引いた。見る見る、馬の頭が、向きを変える。と、また雪のような泡が、栗毛の口にあふれて、蹄は、砕けよとばかり、大地を打った。——一瞬ののち、太郎は、惨として暗くなった顔に、片目を火のごとくかがやかせながら、再び、もと来たほうへまっしぐらに汗馬を跳らせていたのである。

「次郎。」

近づくままに、彼はこう叫んだ。心の中に吹きすさぶ感情のあらしが、このことばを機会として、一時に外へあふれたのであろう。その声は、白燃鉄を打つような響きを帯びて、鋭く次郎の耳を貫ぬいた。

次郎は、きっと馬上の兄を見た。それは日ごろ見る兄ではない。いや、今しがた馬を飛ばせて、いっさんに走り去った兄とさえ、変わっている。険しくせまった眉に、かたく、下くちびるをかんだ歯に、そうしてまた、怪しく熱している片目に、次郎は、ほとんど憎悪に近い愛が、——今まで知らなかった、不思議な愛が燃え立っているのを見たのである。

「早く乗れ。次郎。」

太郎は、群がる犬の中に、隕石のような勢いで、馬を乗り入れると、小路を斜めに輪乗りをしながらか、叱咤するような声で、こう言った。もとより躊躇に、時を移すべき場合ではない。次

郎は、やにわに持っていた太刀を、できるだけ遠くへほうり投げると、そのあとを追って、頭をめぐらす野犬のすきをうかがって、身軽く馬の平首へおどりついた。太郎もまたその刹那に猿臂をのぼし、弟の襟上をつかみながら、必死になって引きずり上げる。——馬の頭が、鬣に月の光を払って、三たび向きを変えた時、次郎はすでに馬背にあって、ひしと兄の胸をいदैいていた。

と、たちまち一頭、血みどろの口をした黒犬が、すさまじくうなりながら、砂を巻いて鞍壺へ飛びあがった。とがった牙が、危うく次郎のひざへかかる。そのとたんに、太郎は、足をあげて、したたか栗毛の腹を蹴った。馬は、一声いななきながら、早くも尾を宙に振るう。——その尾の先をかすめながら、犬は、むなしく次郎の脛布を食いちぎって、うずまく獣の波の中へ、まっさかさまに落ちて行った。

が、次郎は、それをうつくしい夢のように、うっとりした目でながめていた。彼の目には、天も見えなければ、地も見えない。ただ、彼をいदैいている兄の顔が、——半面に月の光をあびて、じっと行く手を見つめている兄の顔が、やさしく、おごそかに映っている。彼は、限りない安息が、おもむろに心を満たして来るのを感じた。母のひざを離れてから、何年にも感じた事のない、静かな、しかも力強い安息である。——

「にいさん。」

馬上にある事も忘れたように、次郎はその時、しかと兄をいदैくと、うれしそうに微笑しながら、頬を紺の水干の胸にあてて、はらはらと涙を落としたのである。

半時ののち、人通りのない朱雀の大路を、二人は静かに馬を進めて行った。兄も黙っていれば、弟も口をきかない。しんとした夜は、ただ馬蹄の響きにこだまをかえして、二人の上の空には涼しい天の川がかかっている。

らしょうもん よ
 羅生門の夜は、まだ明けない。下から見ると、つめたく露を置いた 藁 や、丹塗りののはげた欄干に、傾きかかった月の光が、いざよいながら、残っている。が、その門の下は、斜めにつき出した高い 櫓 に、月も風もさえぎられて、むし暑い暗がり、絶えまなく 藪蚊 に刺されながら、酸えたようによどんでいる。 藤判官 の屋敷から、引き揚げてきた 偷盗 の一群は、そのやみの中にかすかな 松明 の火をめぐりながら、三々五々、あるいは立ちあるいは伏し、あるいは丸柱の根がたにうずくまって、さっきから、それぞれけがの手当に 忙 しい。

中でも、いちばん重手を負ったのは、猪熊の爺である。彼は、沙金の古い 袷 を敷いた上に、あおむけに横たわって、半ば目をつぶりながら、時々ものにおびえるように、しわがれた声で、うめいている。一時の間、ここにこうしているのか、それとも一年も前から同じように寝ているのか、彼の 困憊 した心には、それさえ時々はわからない。目の前には、さまざまな幻が、瀕死の彼をあざけるように、ひっきりなく 徂来 すると、その幻と、現在門の下で起こっている出来事とが、彼にとっては、いつか全く同一な世界になってしまう。彼は、時と所とを分かたない、昏迷の底に、その醜い一生を、正確に、しかも理性を超越したある順序で、まざまざと再び、生活した。

「やい、おばば、おばばはどうした。おばば。」

彼は、暗から生まれて、暗へ消えてゆく恐ろしい幻に脅かされて、身をもたえながら、こううなった。すると、かたわらから額の傷を汗衫の袖で包んだ、交野の平六が顔を出して、
 「おばばか。おばばはもう十万億土へ行ってしもうた。おおかた 蓮 の上でな、おぬしの来るのを、待ち焦がれている事じゃろう。」

言いすてて、自分の冗談を、自分でからからと笑いながら、向こうのすみに、真木島の十郎の腿のけがの手当をしている、沙金のほうをふり返って、声をかけた。

「お頭、おじじはちとむずかしいようじゃ。苦しめるだけ、殺生 じゃて。わしがとどめを刺してやろうかと思うがな。」

沙金は、あでやかな声で、笑った。

「冗談じゃないよ。どうせ死ぬものなら、自然に死なしておやりな。」

「なるほどな、それもそうじゃ。」

猪熊の爺は、この問答を聞くと、ある予期と恐怖とに襲われて、からだじゅうが一時に凍るような心もちがした。そうして、また大きな声でうなった。平六と同じような理由で、敵には臆病 な彼も、今までに何度、致死期の仲間の者をその鉾の先で、とどめを刺したかわからない。それも多くは、人を殺すという、ただそれだけの興味から、あるいは自分の勇気を人にも自分にも示そうとする、ただそれだけの目的から、進んでこの無残なしわざをあえてした。それが今は――

と、たれか、彼の苦しみも知らないように、灯ひの陰で一人、鼻歌をうたう者がある。

いたち笛ふき

さる
猿かなず

いなごまろは拍子うつ

きりぎりす

ぴしゃりと、蚊をたたく音が、それに次いで聞こえる。中には「ほう、やれ」と拍子をとったものもあった。二三人が、肩をゆすったけはいで、息のつまったような笑い声を立てる。――

いのくま おじ そうみ
猪熊の爺は、総身をわなわなふるわせながら、まだ生きているという事実を確かめたいために、
まぶた ともし
重いまぶた 瞳まぶたを開いて、じっとともし火の光を見た。灯ともしは、その炎のまわりに無数の輪をかけながら、
しゅうね こがねむし
執拗しゅうねい夜に攻められて、心細い光を放っている。と、小さな黄金虫こがねむしが一匹ぶうんと音を立てて、飛んで来て、その光の輪にはいったかと思うとたちまち羽根を焼かれて、下へ落ちた。青臭いにおいが、ひとしきり鼻を打つ。

あの虫のように、自分もほどなく死ななければならない。死ねば、どうせ蛆うじと蠅はえとに、血も肉も食いつくされるからだである。ああこの自分が死ぬ。それを、仲間うじ はえのものは、歌をうたったり笑ったりしながら、何事もないように騒いでいる。そう思うと、いのくま おじ
猪熊の爺は、名状しがたい怒りろくろと苦痛とに、骨髄をかまれるような心もちがした。そうして、それとともに、なんだか轆轤ろくろのようにとめどなく回っている物が、火花を飛ばしながら目の前へおりて来るような心もちがした。

「畜生。人でなし。太郎。やい。極道。」

まわらない舌の先から、おのずからこういうことばが、とぎれとぎれに落ちて来る。――
まきのしま もも のど
真木島の十郎は、腿の傷が痛まないように、そっとねがえりをうちながら、喉のかわいたような
しゃきん
声で、沙金しゃきんにささやいた。

「太郎さんは、よくよく憎まれたものさな。」

しゃきん まゆ いのくま おじ
沙金しゃきんは、眉まゆをひそめながら、ちよいと猪熊の爺いのくま おじのほうを見て、うなずいた。すると鼻歌をうたったのと同じ声で、

「太郎さんはどうした。」とたずねたものがある。

「まず助かるまいな。」

「死んだのを見たと言うたのは、たれじゃ。」

「わしは、五六人を相手に切り合っているのを見た。」

とんしょうぼだい
「やれやれ、頓生菩提とんしょうぼだい、頓生菩提。」

「次郎さんも、見えないぞ。」

「これも事によると、同じくじゃ。」

太郎も死んだ。おばばも、もう生きてはいない。自分も、すぐに死ぬであろう。死ぬ。死ぬとは、なんだ。なんにしても、自分は死にたくない。が、死ぬ。虫のように、なんの造作ぞうさもなく死んでしまう。――こんな取りとめのない考えが、暗の中に鳴いている藪蚊やみのように、四方八方から、意地悪く心を刺して来る。猪熊の爺は、形のない、気味の悪い「死」が、しんぼうづよく

にぬ、丹塗りの柱の向こうに、じっと自分の息をうかがっているのを感じた。残酷に、しかもまた落ち着いて、自分の苦痛をながめているのを感じた。そして、それが少しずつ居ざりながら、消えてゆく月の光のように、次第にまくらもとへすりよって来るのを感じた。なんにしても、自分は死にたくない。――

いね
夜はたれとか寝む

ひたち すけ いね
常陸の介と寝む

いね はだ
寝たる肌もよし

男山の峰のもみじ葉

さぞ名はたつや

また、鼻歌の音が、油しめ木ぎの音のような呻吟しんぎんの声と一つになった。とたれか、猪熊いのくまの爺おじの枕まくらもとで、つばをはきながら、こう言ったものがある。

あこぎ
「阿濃のあほうが見えぬの。」

「なるほど、そうじゃ。」

「おおかた、この上に寝ておろう。」

ねこ
「や、上で猫が鳴くぞ。」

みな、一時にひっそりとなった。その中を、絶え絶えにつづく猪熊いのくまの爺おじのうなり声と一つになって、かすかに猫の声が聞こえて来る。と流れ風が、始めてなま暖かく、柱の間を吹いて、うすのうぜんかずら甘い凌霄花のにおいが、どこからかそっと一同の鼻を襲った。

「猫も化けるそうな。」

あこぎ
「阿濃の相手には、猫の化けた、老いぼれが相当じゃよ。」

すると、沙金しゃきんが、衣きぬずれの音をさせて、たしなめるように、こう言った。

「猫じゃないよ。ちょっとたれか行って、見て来ておくれ。」

声に応じて、交野かたのの平六たちが、太刀さやの鞘を、柱にぶっつけながら、立ち上がった。楼上に通う

はしご
梯子は、二十いくつの段をきざんで、その柱の向こうにかかっている。――一同は、理由のない不安に襲われて、しばらくはたれも口をとざしてしまった。その間をただ、凌霄花のにおいのする風が、またしてもかすかに、通りぬけると、たちまち楼上で平六の、何か、わめく声が出た。

そして、ほどなく急いで梯子をおりて来る足音が、あわただしく、重苦しい暗やみをかき乱した。――ただ事ではない。

あこぎ
「どうじゃ。阿濃めが、子を産みおったわ。」

はしご
平六は、梯子をおりると、古被衣ふるかずきにくるんだ、丸々としたものを、勢いよくともし火の下へ出して見せた。女の臭いのする、うすよごれた布の中には、生まれたばかりの赤ん坊が、人間とい

にお
うよりは、むしろ皮をむいた蛙かえるのように、大きな頭を重そうに動かしながら、醜い顔をしかめて、泣き立てている。うすい産毛うぶげといい、細い手の指けんおと言い、何一つ、嫌悪と好奇心とを、同時にそそらないものはない。――平六は、左右を見まわしながら、抱いている赤子を、ふり動か

して、得意らしく、しゃべり立てた。

「上へ上がって見ると、阿濃め、窓の下へつつ伏したなり、死んだようになって、うなっている。阿呆あほうとはいえ、女の部しゃくじゃ。癩しかくかと思うて、そばへ行くと、いや驚くまい事か。さかなの腸はらわたをぶちまけたようなものが、うす暗い中で、泣いているわ。手をやると、それがぴくりと動いた。毛のないところを見れば、猫ねこでもあるまい。じゃてひつつかんで、月明かりにかざして見ると、このとおりに生まれたばかりの赤子じゃ。見い。蚊に食われたと見えて、胸も腹も赤まだらになっているわ。阿濃も、これからはおふくろじゃよ。」

松明たいまつの火を前に立った、平六のまわりを囲んで、十五六人の盗人は、立つものは立ち、伏すものは伏して、いずれも皆、首をのぼしながら、別人のように、やさしい微笑を含んで、この命が宿ったばかりの、赤い、醜い肉塊を見守った。赤ん坊は、しばらくも、じっとしていない。手を動かす。足を動かす。しまいには、頭を後ろへそらせて、ひとしきりまた、けたたましく泣き立てた。と、齒のない口の中が見える。

「やあ舌がある。」

前に鼻歌をうたった男が、頓狂とんきょうな声で、こう言った。それにつれて、一同が、傷も忘れたように、どっと笑う。——その笑い声のあとを追いかけるように、この時、突然、猪熊いのくまの爺おじが、どこにそれだけの力が残っていたかと思うような声で、陰しく一同の後ろから、声をかけた。

「その子を見せてくれ。よ。その子を見せないか。やい、極道ごくどう。」

平六は、足で彼の頭をこづいた。そうして、おどかすような調子で、こう言った。

「見たければ、見るさ。極道とは、おぬしの事じゃ。」

猪熊の爺は、濁った目を大きく見開いて、平六が身をかがめながら、無造作につきつけた赤ん坊を、食いつきそうな様子をして、じっと見た。見ているうちに、顔の色が、次第に蠟ろうのごとく青ざめて、しわだらけの眦まなじりに、涙が玉になりながら、たまってくる。と思うと、ふるえるくちびるのほとりには、不思議な微笑の波が漂って、今までにない無邪気な表情が、いつか顔じゅうの筋肉を柔らげた。しかも、饒舌じょうぜつな彼が、そうなったまま、口をきかない。一同は、「死」がついに、この老人を捕えたのを知った。しかし彼の微笑の意味はたれも知っているものがない。

猪熊いのくまの爺おじは、寝たまま、おもむろに手をのべて、そっと赤ん坊の指に触れた。と、赤ん坊は、針にでも刺されたように、たちまちいたいたい泣き声を上げる。平六は、彼をしかろうとして、そうしてまた、やめた。老人の顔が——血のけを失った、この酒肥さかぶとりの老人の顔が、その時ばかりは、平生とちがった、犯しがたいいかめしさに、かがやいているような気がしたからである

。その前には、沙金しゃきんでさえ、あたかも何物かを待ち受けるように、息を凝らしながら、養父の顔を、——そうしてまた情人の顔を、目もはなさず見つめている。が、彼はまだ、口を開かない。ただ、彼の顔には、秘密な喜びが、おりから吹きだした明け近い風のように、静かに、こちよく、あふれて来る。彼は、この時、暗い夜の向こうに、——人間の目のとどかない、遠くの空に、さびしく、冷ややかに明けてゆく、不滅な、黎明れいめいを見たのである。

「この子は——この子は、わしの子じゃ。」

彼は、はっきりこう言って、それから、もう一度赤ん坊の指にふれると、その手が力なく、落

ちそうになる。——それを、^{しゃぎん}沙金が、かたわらからそっとささえた。十余人の盗人たちは、このことばを聞かないように、いずれも唾^つをのんで、身動きもしない。と、沙金が顔を上げて、赤子を抱いたまま、立っている交野^{かたの}の平六の顔を見て、うなずいた。

^{たん}「啖がつまる音じゃ。」

平六は、たれに言うともなく、つぶやいた。——^{いのくま おじ やみ}猪熊の爺は、暗におびえて泣く赤子の声の中に、かすかな苦悶^{くもん}をつづけながら、消えかかる^{たいまつ}松明の火のように、静かに息をひきとったのである。……

^{おじ}「爺も、とうとう死んだの。」

「さればさ。^{あこぎ}阿濃を手ごめにした^{ぬし}主も、これで知れたと言うものじゃ。」

^{しがい}「死骸は、あの^{やぶなか}藪中へ埋めずばなるまい。」

^{からす}「^{えじき}鴉の餌食にするのも、気の毒じゃな。」

盗人たちは、口々にこんな事を、うす寒そうに、話し合った。と、遠くで、かすかに、鶏の声がする。いつか夜の明けるのも、近づいたらしい。

「阿濃は？」と沙金が言った。

「わしが、あり合わせの衣^{きぬ}をかけて、寝かせて来た。あのからだじゃて、大事はあるまい。」

平六の答えも、日ごろに似ずものやさしい。

そのうちに、盗人が二人三人、^{いのくま おじ}猪熊の爺の死骸^{しがい}を、門の外へ運び出した。外も、まだ暗い。^{ありあけ}有明の月のうすい光に、^{しょうじょう}蕭条とした藪^{やぶ}が、かすかにこずえをそよめかせて、^{のうぜんかずら}凌霄花のにおいが、いよいよ濃く、甘く漂っている。時々かすかな音のするのは、竹の葉をすべる露である。

^{しょうじじだい}「生死事大。」

「無常迅速。」

「生き顔より、死に顔のほうがよいようじゃな。」

「どうやら、前よりも真人間らしい顔になった。」

猪熊の爺の死骸^{はんぱん}は、^{けっこん}斑々たる血痕に染まりながら、こういうことばのうちに、竹と凌霄花との茂^かみを、次第に奥深く昇かれて行った。

翌日、猪熊のある家で、むごたらしく殺された女の死骸が発見された。年の若い、^{ふと}肥った、うつくしい女で、傷の様子では、よほどはげしく抵抗したものらしい。証拠ともなるべきものは、^{しがい}その死骸が口にくわえていた、^{そで}朽ち葉色の水干の袖ばかりである。

また、不思議な事には、その家の^{みずし}婢女をしていた^{あこぎ}阿濃という女は、同じ所にいながら、薄手一つ負わなかった。この女が、^{けびいしちょう}検非違使庁で、調べられたところによると、だいたいこんな事があったらしい。だいたいと言うのは、阿濃が天性白痴に近いところから、それ以上^う要領を得る事が、むずかしかったからである。――

その夜、阿濃は、夜ふけて、ふと目をさますと、太郎次郎という兄弟のものと、^{しゃきん}沙金とが、何か^{こわだか}声高に争っている。どうしたのかと思っているうちに、次郎が、いきなり^{たち}太刀をぬいて、沙金を切った。沙金は助けを呼びながら、逃げようとする、今度は太郎が、^{やいば}刃を加えたらしい。それからしばらくは、ただ、二人のののしる声と、沙金の苦しむ声とがつついたが、やがて女の息がとまると、兄弟は、急に^{やど}いだきあって、長い間黙って、泣いていた。阿濃は、これを遣り戸のすきまから、のぞいていたが、主人を救わなかったのは、全く抱いて寝ている子供に、けがをさすまいと思ったからである。――

「その上、その次郎さんと申しますが、この子の親なのでございます。」

^{あこぎ}阿濃は、急に顔を赤らめて、こう言った。

「それから、太郎さんと次郎さんとは、わたしの所へ来て、たっしゃでいろよと申しました。この子を見せましたら、次郎さんは、笑いながら、頭をなでてくれましたが、それでもまだ目には涙がいっぱいたまっておりました。わたしはもっとそうしていたかったのでござりますが、二人とも、たいへんに急いで、すぐに外へ出ますと、おおかた^{びわ}枇杷の木にでもつないでおいたのでございましょう、馬へとびのって、どこかへ行ってしまいました。馬は二匹ではございせん。わたしが、この子を抱いて、窓から見ておりますと、一匹に二人で乗って行くのが、月が^{しがい}ございましたから、よく見えました。そのあとで、わたしは、主人の死骸はそのままにして、そっとまた床へはいりました。主人がよく人を殺すのを見ましたから、その死骸もわたしには、こわくもなんともなかったのでございます。」

^{けびいし}検非違使には、やっとこれだけの事がわかった。そうして、阿濃は、罪の無いのが明らかになったので、さっそく自由の身にされた。

それから、十年余りのち、尼になって、子供を養育していた阿濃は、^{たんごのかみなにがし}丹後守何某の隨身に、^{きょうゆう}驍勇の名の高い男の通るのを見て、あれが太郎だと人に教えた事がある。なるほどその男も、^{いも}うす痘瘡で、しかも片目つぶれていた。

「次郎さんなら、わたしすぐにも駆けて行って、会うのだけれど、あの人はこわいから……」

^{あこぎ}阿濃は、娘のようなしなをして、こう言った。が、それがほんとうに太郎かどうか、それはたれにも、わからない。ただ、その男にも弟があって、やはり同じ主人に仕えるという事だけ、そののちかすかに風聞された。



偷盜

平成二十三年二月十八日 初版

著者

芥川 龍之介

発行所

藍岩堂